
IS 二人目の男性IS操縦者は転生者？

メテオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 二人目の男性IS操縦者は転生者？

【Nコード】

N8190W

【作者名】

メテオ

【あらすじ】

神のせいで死んだオリ主が転生し、ISの世界で原作ブレイクをやりまくる？小説です

文才がほとんど無くて、いつもは、読んでばかりですが・・・
(2つ小説を書いています、こちらをメインにします)

第1話 プロローグ（前書き）

はじめに誤ります

文才無くて 御免なさい

第1話 プロローグ

テンプレ乙といえば、大体の方は分かるでしょう。

分からない方のために説明します

テンプレ乙とは、小説等で神が誤って死なせてしまったお詫びに転生する権利を与え、更に願いをいくつか（大抵は3つ）かなえて、転生をさせるということです

僕の名前は上条 朋希だ

そして僕は今全てが真っ白い空間にいました

「ここはどこだ？」

『死後の世界・・・といったら分かるかの？』

「ああ、そういうことですか、あなたが神様で、僕を誤って死なせてしまったということですか？」

『な・・・なんでわかるんじゃない？』

「だってテンプレですから」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

「ところで死因はなんですか？」

『窒息死じゃ、一応即死ということになってるぞい』

「ああ、そうですか」

『そういうことじゃ』

「あ、そういえば行く世界と姿は願いに含まれませんよね？」

『もちろんじゃ』

『そういえばお主現世に未練は無いのか？』

「ありません。あるといえば、好きだった幼馴染に告白できなかったことと、買ってきたIS7巻を読めなかったということでしょうか？」

『ならISここで読むかえ？それと幼馴染の名前は何じゃ？』
「あ、はい。読みます。あ、幼馴染の名前は絹本 瑞樹です」
(1巻から全部読んだ)

〽数時間後〽

「読み終わりました」

『でどこの世界じゃ？』

「ISの世界じゃ」

『やはりな。それ位予想できたわい』

「それで、姿は普通以上で任せます」

『分かった』

『ちなみに何個でもいいぞ』

「欲しい能力は

・王の財宝

・IS適正SS

・スーパーコーディネーター並みの能力(それも篠ノ之 束を超える
天才と織斑 千冬を超える運動能力)

・後からでもお願いを追加できるように通信できるようにすること
の以上です」

『分かった』

『もうそろそろいくかえ？』

「はい。何から何までありますがとうございました」

第1話 プロローグ（後書き）

オリ主の名前を募集します
感想に書いて送ってください

第2話 IS学園に入るまで

IS学園に入るまでを省かせていただきます
理由は作者の技量不足です
まあ回想で簡単に語らせていただきます

～回想～

3歳のとき事故で両親を亡くす
その後は20才の兄と2人で暮らす

5歳で天才を発揮し、篠ノ之 束に気に入られる（織斑姉弟と、篠ノ之 箒は既に友人関係）
ただし、ISの開発前にフランスに飛んでいる

フランス

6歳ぐらいのときシャルロット・デュノアと友人（幼馴染）になる

13歳のときに日本に戻る

一夏や鈴、弾と同じ学校、同じクラスになる

凰 鈴音、五反田 弾と友人になる

また、篠ノ之 箒が引越すのは中学1年の夏休みが終わってから
1ヶ月程度たってからとなっている

そのため、凰 鈴音と篠ノ之 箒はお互い友人（親友？）になっている

愛越学園の入試試験のとき、道に迷っていたが、（主に一夏のせい）

一夏が「ここであつてゐる」といつて入つたが、そこにはISが有り、二人とも動かしてしまふ

IS学園に強制入学させられる

〽回想終わり〽

「―――くん」
「―――くん」

「織斑一夏君」

「はっ はいっ」

「ひゃっ!？」

「あ あの お

大声出しちゃってごめんなさい

お 怒ってる？

怒ってるかな？

ゴメンね ゴメンね!」

「でもね あのね」

「自己紹介って「あ」から始まって今「お」の織斑君なんだよね」

「いや あの そんなに」

「謝らなくても・・・」

「しますから」

「自己紹介しますから」

「ほ・・・本当ですか？

や・・・約束ですよ!絶対ですよ!断ったらISで倒しますよ!!」
「!」

こ・・・・・・怖い

「えー えっと 織斑 一夏です」

「よろしくおねがいします」

うう……ここでなんか言わないと暗い奴のレッテルをはられてしまふ……

「い・・以上です「バシィイン」」

「お前はもう少しまともに自己紹介できんのか馬鹿者」

「いや千冬姉……俺は……」

「学校では織斑先生と呼べ」

「……はい織斑先生」

「……今のって」

「織斑君って……」

「ひょっとして……」

「じゃあISを動かせるのもそれが関係して……」

「いいなあ変わって欲しいな……」

「そういえば苗字も一緒だし……」

やべ……ばれた

く一之瀬視点く

「都合で遅れてきた奴がいる 入れ」

「はい」

「一之瀬 拓海です」

趣味は機械いじり、特技はスルースキルと読心術、平行思考ですちなみに平行思考は一度に100以上やったことが有り、ISでオー

ルレンジ攻撃を行える機体があれば、多分ビットを動かしながら移動し、攻撃すること等が出来ると思います

よろしくお願いします」

[illegible]

「織斑君と同じでイケメンでちよつとクールっぽい」

「騒ぐな 静かにしろ」

「二之瀬お前の席は真ん中の列の一番後ろだ」

「はい、分かりました」

「諸君　私が織斑千冬だ　君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ」

「出来ないものには出来るまで指導してやる 逆らってもいいが私の言うことは聞け いいな」

「キャー本物の千冬様よ！」

「美しすぎます」

「愛してます！」

「恐れ多くてお顔を見られません」

「ずっとファンでした」

「お姉さまにあこがれてこの学園に着たんです。南九州から」

「私お姉さまのためなら死ねます」

最後から2番目の奴南九州よりも遠いところから着てるのもいるんだぞ

最後の奴恐ろしい子というな

「……毎年良くもこれだけ馬鹿者が集まるものだ
関心させられる」

「それとも私のクラスにだけ集中させられているのか？」
おそらく後者ですよ

「まあいい これでSHRは終わりだ

諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう！！

その後実習だが基本動作は半月で体に染み込ませろ

いいか いいなら返事をしろ

良くなくても返事をしろ

私の言葉には返事をしろ」

「拓海、箒のところいくか？」

「いや、遠慮しとくよ。二人っきりで話しておいでよ」

「箒、話がある。屋上でいいか？」

「ああ、構わない」

「あ、僕はここで待ってるよ。二人っきりで話しておいで」
「ああ、分かった」

「ふー」

「・・・・・・・・・・」

「久しぶりだな箒」

「え？」

「直ぐ箒ってわかったぞ」

「髪型、昔と同じだしな」

「・・・・・・・・よく覚えているものだな」

「そりゃ覚えてるって」

「幼馴染のことぐらい」

「」

「そういえば去年剣道の全国大会で優勝したってな
おめでとう」

「なっなんでそんなこと知ってるんだ!？」

「何でって新聞読んだし」

「なっなんで新聞なんか読んでるんだ!？」

「べ」「キンコーンカーンコーン」やば、予報だ急がないと
「ああ、そうだな」

第4話

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明を………」

「ああ、その前に」

「再来週のクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

「は——い！！織斑君がいいと思います！」

「私も私も」

「そーだねせっかくだし！」

「納得できませんわ！！」

「そのような選出は認められません！」

「大体男がクラス代表などいい恥さらしですわ」

「このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか？」

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然です！」

正直この手合いは苦手だ

今の世の中I Sのせいで女性はかなり優遇されている
優遇どころかもはや女Ⅱ偉いの構図にまできている
つまりそういう女子が目の前にいた

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、つまりそれは私ですわ！」

「何せわたくし入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「イギリス代表候補生である私以上にふさわしい人間はいないはずですわ」

「入試ってあれか？ I S 動かして戦う奴」

「それがいいにありませんわ」

「それだったら俺と拓海も倒したぞ」

「なっ！！」

「あなた方も教官を倒したって言うの！？」

「えーっと多分」

「僕は倒したよ。そこにいる織斑先生を。正確には3時間戦って決着がつかなかったから残りシールドエネルギーの判定で勝ったただけだけどね」

「な・・・なにをおっしゃっているのかしら極東の猿は」

「へー君そんなことを言うんだ、じゃあ織斑先生に三時間以内で倒せる自信があるの？僕は無いけどね。というよりは各国の代表でも勝てないと思うけどww」

「決闘ですわ」

「いーぜ四の五のいうよりわかりやすい」

「僕も別にいいよ。あ、織斑先生、僕自推でお願いします」
「分かった」

「決闘は一週間後の月曜日。第3アリーナで行う」

「「「わかりましたー（わ）」」」」

「えーっと織斑君どこか分からないところがあったら言ってくださいね

何せ私は先生ですから」

「じゃあはい」

「はい！織斑君」

「ほとんど全部分かりません」

「え・・・全部ですか」

「織斑、入試のときにもらった参考書はどうした？」

「あ、タウンページみたいな奴ですか？それなら間違えて捨ててしまいました」

パソコンX5

一之瀬視点

「よかった 織斑君と一之瀬君まだ教室にいたんですね えっとです
ね寮の部屋が決まりました

「織斑君が1025室で篠ノ乃さんと相部屋で一之瀬君が1026
室の二人部屋を一人で使ってもらうことになります」

「「わかりました」」

「えーっと1026 1026ってどこか」

「ふうー広い」

「みっみるな――

――!!!!!!」

「なんだ？ 箒の声みたいだけど。ま、いいや」

一之瀬視点

「そういやさあ……」

「なんだ？」

「ISの事教えてくれないか？ このままじゃ来週の勝負何も出来ずに負けそうだ」

「くだらない挑発に乗るからだ。馬鹿者め」

「そのをなんとか頼む」

「……」

あれ？ 俺空気？ ……

「ねえ」

「君たちって噂の子でしょ？」

「はぁ・・・多分」「おそらくあつてだと思います」

「代表候補生の子と対戦するって聞いたけどホント？」

「「はい、そうです」」

「君たちさ・・・I Sの稼働時間はどのくらい？」

「俺は20分ぐらいです」

「俺は500時間ぐらいです」

「え・・・なんでそんなにのってるの？」

「口止めされてるので言えないです」

「そっか・・・」

「でも織斑君のほうは無理だと思うよ？」

稼働時間に比例して上達するのよ？・・・絶対無理ね」

「私が教えてあげよっか？」

「I Sのこと」

「はい、ぜ」「それなら私が教えますので結構です」

「え・・・」

「あなたも一年でしょう？私の方が「私は篠ノ之 束の妹ですから」

「篠ノ之って・・・ええっ!!」

「そ・・・そうそれなら仕方ないわね」

「あなんかスイマセン」

「・・・なんだ」

「なんだって・・・いや教えてくれるのか？」

「そう言っている」

「今日の放課後剣道場にこい

一度腕がなまっていなしか見てやる」

翌週月曜日

クラス代表戦当日 第3アリーナ

「なあ箒・・・」

「なんだ一夏」

「この一週間剣道しかしてこなかったんだが」

「ISの事教えてくれる約束はどうなったんだ？」
プイッ

「めをそらすな」

「なあ箒・・・あとでO☆H A☆N A☆S H Iしようか」
「・・・・・・・・・・」ガタガタブルブル

「織斑君織斑君織斑君織斑君織 無限ループ終わってください」

「あ・・・はい」

「それですね、来ました。織斑君せんようなIS「百式・・・じやなかった白式です」

「背中を預けるようにしろ・・・ああそうだ」

「後はシステムが最適化してくれる」

「ハイパーセンサーは問題なく動いてるな。一夏気分は悪くないか？」

「大丈夫千冬姉いける」

「箒、拓海。行ってくる」

「勝ってこい」「逝ってこい」

「拓海・・・流石にそれはつらいぜ・・・」

「まあ勝ってこい」

「分かった」

第5話

「――27分　よく持ったほうですね」

「そりゃどうも」

「でもさらさら負ける気はないんでねッ」

ビットを1機ずつ確実に減らしていく

「ハアアアア」

「おあいにくさま。ブルーティアーズは六機ありましてよ」

「ミサイル!?!」

「一夏あ!!!!!!」

「案外しぶとかったですが、所詮この程度ですの」

「いや　まだ終わっていない」

「なっ!?!^{ファーストシフト}一時進化!?!　これまで初期設定で戦っていましたの!?!」

「俺も俺の家族を守る」

「はあ?　あなた何を言って――」

「とりあえずは千冬姉の名前を守るさ」

「だから何の話を」

「うおおおおおお」 バコオオン

「ふう、特攻を仕掛けてきたときはどうなったのかと思いますが、単純で助かりましたわ」

「もし特攻を仕掛けてこなかったら今頃どうなっていたか……」

『シールドエネルギーエンプティ——勝者 セシリア・オルコット』

「よくもまあ持ち上げてくれたものだ」

「それで特攻を仕掛けてこのざまか」

「大馬鹿者が」

「よし、次だ一之瀬、30分後にオルコットとの試合開始だ」

「ハッ了解です」

バシン

「ここは軍隊じゃなくて学校だ」

「イ……イエスマム」

30分後

「一之瀬 拓海 RX-78 行きまーす」

「なっフルスキнтаイプ!? そんなの見たこと有りませんわ!？」

「まあ多分そうだろうな。宇宙活動も出来るようにしたし、大気圏突入システムもつけたから、宇宙空間でも使用できる、しかもブースターで普通に宇宙に出れる」

「あ・・・ありえませんか。そんなのどこで・・・」

『それではセシリア・オルコット対一之瀬 拓海の模擬線を始める』

『バトル スタート』

ハイパーバズーカ「バコオンバコオンバコオンバコオンバコオンバコオンバコオンバコオンバコオン」

「な・・・なんですの!？」

「まだまだ続くぜエ」

ビームライフル2丁流+頭部バルカン「パソコンパソコンパソコンパソコン」

現在シールドエネルギー拓海300セシリア100

「フルバースト」バコオオオオオオオオ

『――セシリア・オルコット、シールドエネルギーエンプティ

勝者 一之瀬 拓海」

観客席にいたメンバー「「「「「え? な・・・なに? 何が起こったの!？」」「」」「」」

「織斑・・・一夏・・・
知りたい・・・彼のことをもっと・・・」

「はーいという訳で・・・」

「一年一組クラス代表は織斑一夏君に決定です」
「あ！一つながりでいい感じですね」

「先生！俺は負けたんですよ
何でクラス代表に・・・」

「それは俺と」「私が辞退したからですの」
「まあ・・・確かにあなたは負けましたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと」

「このセシリア・オルコットが相手だったのですから、それは仕方

「な．．．SS．．．」

「ちょ．．．織斑先生ばらさないでくださいよ」

「クラス代表は織斑一夏依存はないな」

スルーされた．．．

「「「は——い!!」」」

「ふうん．．．」

「ここがIS学園」

「ここにあいつがいるのね．．．」

「まさかあいつ達がIS操縦者になるなんてね．．．」

「うう．．．．．迷った．．．」

「あっ鈴! ひよっとして迷ったの?」

「そうよ! 拓海ありがと」

「いって。着いてきて、案内するから」

「わかったわ」

「はい。凰鈴音さん。これで転入手続きは終わりです」

「あのく織斑一夏って何組ですか？」

「ああ、あの噂の子ね。それなら一組だから同じクラスだね。なんでもクラス代表になったそうよ。流石織斑先生の弟さんですね」

第5話（後書き）

うう・・・・・・・・・・戦闘シーンを書くのが難しい・・・・・・・・

誤字、脱字ありましたらお知らせください

第6話 転校生はセカンド幼馴染

「ねえねえ聞いた？この噂」

「このクラスに中国代表候補生が転校してくるらしいよ」

「転校生ねえ・・・」

「私の存在を危ぶんでの転校かしら」

「いや、多分僕と一夏だと思うよ。どこの国にしても取り入れたいと思うし」

「ああ、多分そうだろうな」

「代表候補生か・・・どんなやつなんだろうな」

「きになるんですの？」 「きになるのか？」

「ああ、多分強いと思うから戦ってみたい」

バトルマニア

「「 戦闘狂 でしたの（だったのか）！？」」

「いや、そうじゃない。戦いたいだけだ」

「一夏、それをバトルマニアと呼ぶんだよww」

「そんなわけないだろ」

「ってあれ？逃げるのか？」

バコン

「席に座れ。織斑」

「ご指導ありがとうございます織斑先生」

「あのー織斑先生、中国代表候補生が転校してくるといいう噂があるんですけど本当ですか？」

「ああ、本当だ。丁度今から自己紹介をする。入って来い」

「中国代表候補生 凰鈴音よ。好きな食べ物はラーメン。特技は中国拳法、よろしくね」

「時間は飛んで休み時間」

「鈴久しぶりだな」「鈴ひさしぶり」

「そうね。箒とは3年、一夏と拓海は一年ぶりだし」

「それにしてもいつの間に代表候補生になったんだ？」

「ああ、それは中国に入ってから、色々あってとりあえず適正を調べたの。それでA+でその後カクカクシカジカで代表候補生になったの」

「「そうなんだ」「」」

「一夏さん？この方との関係は何ですか？」

「ああ、セカンド幼馴染だ」

「そう・・・ですの」

「キーンコーンカーンコーン」

「やば、早くしないと授業始まる」

「そうだね」

「ええと2時間目の授業ではISの知識を高めます」

皆さんはISのコアが467個しか知らないのは知ってますよね

それでどうして「山田先生、ちょっと待ってください。それに間違いが有ります」

.....

「ISのコアは467こしか公表してないだけで実際にはもっとあ

「3時間目はグラウンドでの訓練だ。各自遅れないように」

「拓海く更衣室いくぞ」

「ああ、先に行っててくれ」

「まさかお前女」馬鹿かお前。ISの量子変換技術を応用して0.00000000001秒で着替えるように出来る奴を使うんだよ。既に全ての服を入れてる。一夏のも明日には渡せると思うから」「わかったよ」

グラウンド

「一之瀬、織斑はどうした」

「分かりませんISの技術の応用で0.01秒以下で着替えることの出来る装置を作ったので更衣室には行ってませんから」

「そうか、分かった。後私にもその装置をくれ」

「分かりました。明日には完成しますから。量産を開始することがね」

「量産だと、100個ぐらい収納できますよ」

「ちなみに一夏たちに渡すのは特別タイプで1000個以上収納できますよ。ちなみにイメージするだけでいけますが、覚えるのが大変なので空中ディスプレイで選択も出来ますよ。まあ量産も同じですが」

「ほう凄いな。っとやっときたか」

「遅いぞ織斑」

「遅いって・・・まだ授業始まってないんですからいいでしょう？」

「まあ・・・」

「まあいい。織斑、オルコット、凰、一之瀬 ISを展開しろて急上昇しろ」

「「了解」」

「わかりました……」

「まだ出来んのか」

「もう少しです……」白式やっと展開

「ところで一之瀬、前のRX-78-2とは違うようだが」

「簡単ですよ。あれよりも高いスペックのISを作っただけですよ。
第3世代のね」

「名前はガンダムガンダムMk-？です。他にも色々開発途中のが
ありますけどね」

「まあいい。急上昇しろ」

「はい」

「早っ」

「織斑、何をのろろしている、ガンダムMk-？はともかくブル
ーティアーズより白式の方がスペック上は上だぞ」

「ええと……」

「急上昇は確か前方に角錐を展開するイメージ……」

「一夏さん イメージは所詮イメージですわ自分にあった方法を模
索するほうが建設的ですわよ」

「そういわれても……」

「一夏、とにかくがんばればいいのよ」

「そうだぞ、とにかくがんばればいいから」

「そんなこと言っても……」

「大体空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ
どうやって飛んでるんだ？」

「別に説明してあげてもいいけど長いよ？」

「反重力力翼と流動波干渉の話になるから・・・大体3時間ぐらいだし」

「いや・・・説明はいいよ」

『一夏っ!!』

『いつまでそんなところにいる!早く降りて来い』
「篠ノ之さんインカム返してください~~~~~」

『お前たち、次は急降下と完全停止をやって見せろ
目標は地表から十センチだ』

「「「はい」」」

「じゃあ先に行くね」

ギ—————イイン

「うゝん9・6センチか」

「次は私ですわ」

ギ—————イイン

「十センチ丁度ですの」

「次は僕だね」

ギ—————イイン

「地上から0・03センチか」

「一之瀬、せめて0・1センチにしろ」

「はい、次からはそうします」

「最後は俺だ」

ギ—————イイン

よし急降下は・・・背中の翼からロケットファイヤーが噴き出すイ
メージ

「馬鹿者グラウンドに穴を開けてどうする」

「誰が地上に激突しろといった?」

「・・・すみません」

「自分であけた穴だ、誰にも頼らず自分で埋めておくように」

「・・・はい・・・」

「織斑くん!!」

「あのさ ちょっと聞きたいんだけど」

「何か用？」

「狂夕食の後って何か用事ある？暇？」

「特に何もないけど・・・」

「本当？やったあ!!」

「じゃあ夕食の後ちよつと付き合つてよ!そっちの4人もね」

「」「え?」」「」

「織斑一夏クラス代表就任パーティー?」

「というわけでっ!」

「織斑くんクラス代表決定おめでとぅぅ!!」

「対抗戦がんばってね」

「フリーパスのためにもがんばってね」

「分からないところあれば聞いてね」

「あ・・・ありがとう」ハア

「人気者だな一夏」

「本当にそう思うか？」

「ふん」

「おゝい一夏こっち来いよ」

「ああ、今行く」

「あついたいた　織斑くゝん」
「ん？」

「話題の新入生の織斑一夏君と一之瀬拓海君に特別インタビューに来ました」

「新聞部部长二年の黛薰子です」部長に昇格！

「はい　これ名刺！よろしくね」

「えっとずばりクラス代表になった感想は？」

「まあ・・・なんというかがんばります」

「もっといいコメント頂戴よく俺に触ると火傷するぜ！とか」

「自分・・・不器用ですから」キリッ

「うわゝ前時代的」

「まあそこは適切（適当）に捏造するから良いとして」

「良くないですよ黛先輩」

「まあいいじゃん」

「一之瀬君コメント頂戴。あ、何でクラス代表を辞退したのかで」

「単純に経験をつんで欲しかっただけです」

「ふむふむこれは捏造のやりがいがありそうだ」

「しないでくださいっ!!」

「セシリアちゃんもコメント頂戴」

「こういうことは余り「長くなりそうだからやっぱいいや」

「織斑君に惚れたからってことにしとこ」

「何を・・・／／／／」

「何を馬鹿なことを」

「えゝそうかな」

「そっそうですわ。何を持って馬鹿としているのかしら」

あれ？何でセシリアが俺に怒るの？」

「じゃあ質問はこんな感じで・・・」

最後に4人の写真取らせてよ」

「注目の専用機持ちだしね」

「あ、握手してね」

「はいそれじゃあ」

「 $19 \times 5 \times 2 + 3 \times 2$ は？」

「えっと222？」

「正解」

「ちょっとなんでみんな入っていますの？」

「まあまあセシリアだけ抜け駆けはじゃん」

第6話 転校生はセカンド幼馴染（後書き）

終わり方中途半端で申し訳ございません

主人公設定&主人公機設定（前書き）

そういえば主人公の設定やっけないんじゃないや・・・ってことで作りま
した

主人公設定&主人公機設定

いちのせ たくみ

名前 一之瀬 拓海

姿 秘密（作者が考えてないですよ御免なさい）

声 秘密（同上）

性別 男

主人公機

初代ガンダムことRX-78-2

以下武装

60mmバルカン砲（内蔵：弾数50）×2

ビーム・ライフル

（オプションでスーパー・ナパームを装備）

ハイパー・バズーカ

ビーム・サーベル／ビーム・ジャベリン×2

シールド

ガンダム・ハンマー

ハイパー・ハンマー

RX-78をISにしたような感じです

ガンダムMk-II

形式番号 RX-178

武装

・頭部バルカン・ポッド

・ビーム・サーベル×2

・ビーム・ライフル

・ハイパー・バズーカ

・シールド

・拳部マルチプル・デイスチャージャー×2

・ミサイル・ランチャー（劇場版『Z』）

・ロング・ライフル（劇場版『Z』）

ハイWまんまMk—I Iです
ねW

主人公設定&主人公機設定（後書き）

作者曰く

『最強のガンダムはZZだから最終にする』とのことですが
しかもIフィールドとVPS装甲とGNドライブを搭載するらしい
です

まあ簡単に言うと『ZZ+ダブルオークアンタ』らしいです

第7話

「え？」

「おいおい何で箒がいるんだ？ 拓海と鈴とセシリアに教えてもらうはずだったか？」

「な・・・なんだその顔は・・・おかしいか？？」

「いや、その・・・」「簡単に言うとなんでそんな簡単に訓練機が取れたのかって言うこと」

「簡単に取れるだろ？」

「「取れないから」」

「まあ多分運がよかったんだろ」

「そ・・・そうね。そうとしか考えようがないわ」

「（くそっライバルは少ないほうがいいのに・・・）」

箒の睨みつける攻撃VSセシリアの睨みつける攻撃

「はぁ・・・一夏、拓海。先にはじめましょ」

「「そうだな（ね）」」

「って何先に始めてますの！！！！！！」

「そうだ！ 何で先にはじめるのだ」

「なんでってねえ・・・あんた達が喧嘩してるからでしょう」

「ふうーやっとな終わった」

「このぐらいで疲れるのか。鍛え方が足りん」

「そうですね。もう少し鍛えたほうがいいですわ」

「はい、一夏お疲れ〜えっとドリンクとはぬるいスポーツドリンクでよかったよね」

「ああ、ありがとう」あれ？鈴ってこんなに可愛かったけ？

「一夏さあやっぱ私がいないと寂しかった〜？」

「ああ、やっぱり遊び相手がいないと寂しいな」

「んん、一夏、私は先に帰る。シャワーは先に使っていいぞ」

「分かった」

シューーン

「え？一夏、シャワーってどういうこと？」

「ああ、急に転校になったから、強制的に箒の部屋に入れられたんだ」

「へえ〜そうなんだ」殺気を出し始める

「あ、部屋を替わってもらおうって思っても無駄だぞ？」

「なんで？」

「一年の寮長、千冬姉だから・・・」

「そ・・・そうなんだ・・・諦めるしかないわね」

「そうだ！一夏、約束覚えてる？」

「ああ、え〜っと『私の料理の腕が上がったら毎日酢豚食べてくれる？』だったよな。その答えは臨海学校のときでいいか？」

「うん、良いわよ」

やった〜一夏が私の好意に気付いてくれた〜

〜数週間後 クラス代表戦決勝当日〜

「一夏、勝って来い」

「ああ、もちろんそのつもりだ」

『決勝戦の試合ルールは簡単。試合開始の合図がなってから1分以内に攻撃し、試合をする。合図が鳴ってから、1分以内に出撃しなければ、相手の不戦勝となります』

『試合開始!!』

「織斑一夏 白式 行きます」

相手は量産機、一気に決める!

「はああああああ」瞬間加速で相手に接近!

ちっ相手は射撃形か。だがローリングやバレルロールを使い相手に接近する!

零落白夜!

『4組代表シールドエネルギーエンプティー 勝者1組代表。よってフリーパスの権利は1組に与えられます』

ズドオオオオオン

『こちら管理室。織斑聞こえるな』

「はい、聞こえます」

『もう少しで教師陣が突入する。それまで持ちこたえろ』
「了解」

「山田先生、そこを変わってください。それと突入隊を第1ハッチに集めてください」

「あっはい分かりました」

「ハッキング開始・・・・・・・・・・・・・・・・」

・ハッキング終了」

「第1ハッチオープン」

「カタパルトシステムのプログラム完了。順次出撃してください」
「了解」

「織斑先生。僕も出ます。後は頼みます」
「分かった」

「出撃します」

「生体反応検地・・・生体反応無」『織斑先生聞こえますか？相手は無人機です。各機に連絡お願いします』
『了解した』

何なんだこいつ・・・気味が悪い

「はあああああああ」
フルバースト

敵ISの停止を確認

敵ISの再起動を確認

「ぜやあああああああ」

「これで終わりだあああ！.....！！！」

「ふう今度こそ終わりだな」

「プルルルプルルル」

「あ、兄さん？」

「ああ、俺だ。ISの会社を作ったから、そこに入らないか？」

「別にいいよ。で社員は？」

「今のところ俺だけだ」

「分かった。入るよ」

「で、詳細は？」

「後で端末に送っておく」

「分かった」

名称・・・モルゲンレーテ

社員・・・現在2名（現在募集中）

社長・・・一之瀬 和也

テスパイ・・・一之瀬 拓海

ブルードライヴ

量産形IS・・・第2世代最終形 蒼き疾風

性能 中期第3世代に負けないスペック

現在試作中

量産開始は1週間後

「・・・・・・」アハハ

「凄いWWW」

「あ、織斑先生。明日と明後日に駆けて外出許可及び外泊許可をお願いします」

「理由は？」

「兄が会社を作ったらしくてWそこに行けと。あ、それからRX―78とMk―IIはモルゲンレーテ所属に変更してください」
「分かった」

第7話（後書き）

ええ、そうなんです

ここの一夏は少し鈍感具合が直ってます

だから、鈴の好意は気付のみいてます

あ、作者はシャルロット党ですよ

第8話

「ら、来月の学年別個人トーナメントだが・・・」

「話、私が優勝したら」

「け、結婚を前提に付き合ってもらおう」

「だが断る。別に買い物だったらいけど」

「きィ貴様ア」

「はいはい落ち着け」

「落ち着いてなどいられるか」

〳六月頭、日曜日〵

「で？」

「で？って何？」

「だから女の園の話だよ。いい思いしてるんだろ？」

「してないよ」

「嘘付け嘘を」

「はぁ・・・じゃあIS学園入る？」

「はぁ？どうやって入るんだよ」

「簡単簡単。僕の兄さんのやってる会社のISのテストパイロットという名目で入ればいいんだよ」

「だ・か・らどうするんだよIS動かせないぞ」

「大丈夫、僕の作ったコアは男でも動かせるから」

「・・・は？」

「だ・か・ら僕の作ったコアは男でも動かせるんだよ」

「はぁ？ISのコアなんで作れるんだよ」

「なんでって・・・解析したから？」

「で、その会社の名前は？」

「モルゲンレーテ」

「もう一回頼む」

「だからモルゲンレーテだって」

「えーっとあの設立から1ヶ月もたっていないのに大企業のカテゴリに入ってたって言うあのモルゲンレーテ？」

「そ」

「いや、でもあそこの就職の倍率1万越えてるだろ」

「モーマンタイ僕のコネでテスパイとして入れる」

「でも俺ISの事全く知らないぜ？」

「大丈夫。えーっとちよつと待ってね」ガサゴソガサゴソ

「あった」

「えーっとなにそれ」

「参考書」

「それは分かるけど何でそんなの持ち歩いてるんだよ」

「持ち歩いてないよ。これに入れてるだけだよ」量子変換バッグ

「そんなの聞いたことないんだけど」

「当たり前。うちの会社の試作品だし」

「」

「ま、とりあえず読んでいて。ちよつと電話する」

「分かった」

『あ、もしもし兄さん?』

『何のようだ? 今職務中なんだけど』

『とりあえず弾会社入れてくれない?』

『分かった。手配しておく』

『ああそれと『第4世代型のISを1つ作ってくれだろ?』そういうこと』

『分かった。でもイメージインターフェイスと展開装甲をつけるのはお前しか無理なんだから帰って来いよ』

『分かった。後で行く』

『でどうなんだ?』

『もうじきモルゲンレーテ所属になるはず。あ、IS学園行くこと伝えとか無くていいの?』

『あ、そうだった。伝えてくる』

『あ、もしもし千冬さん?』

『なんだ?』

『3人目の男のIS操縦者出たんでお願いできます?』

『名前は？』

『五反田 弾です』

『ふっあいつか』

『ええ。そうです』

『確か一夏のどこ空いてましたよね。僕のほうは転校生が来るから駄目みたいだし』

『そうだな。一夏の部屋にしておく』

『後で詳細を送りますね』

『分かった』

「あれ？織斑先生どうしたんですか？」

「出たんだよ。4人目のIS操縦者が・・・しかもモルゲンレーテ所属の」

「・・・アハハハハ（汗）良く出ますね」

「そうだな」

「そういえば試作型の第3世代型ISってもうおわって量産型第3世代のISを量産開始するとか言う噂がありましたね」

「そうだな。今度聞いてみるか」

「えーここで臨時緊急ニュースが有ります」

モルゲンレーテの発表によると量産型第3世代のISを量産開始した模様です

名前は蒼き稲妻です 臨時ニュースを終わります

「噂をすればなんとやらだな」

「ですね」

「お兄！さっきからお昼ごはんできたていってんじゃん。早く降りて着なさ——」

「あ、久しぶり」 「久しぶり。お邪魔してるよ」

「いっ一夏……さんと拓海さん!？」

「い、いや来てたんですか？ I S 学園に通ってるって聞いてたんですが」

「ああ、ちょっと外出しててここに寄ったんだよ」

「そ、そうですか」

「蘭、お前ノックぐらいしろよ。恥知らずの女だと——」
「——」
ギンッ

「……………なんで言わないのよ」

「い、いや、言ってなかったか？ そうか、そりゃ悪かったな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、あの一夏さんたちもお昼どうぞ」

「ありがとう」「ありがとう。頂くよ」

「い、いえ／＼／＼」

「しかし、アレだな。蘭ともかれこれ三年の付き合いになるけど、まだ俺に心を開いてくれてないのかねえ」

「は？」

「この鈍感大魔王が」

「なあ拓海」ムシヤムシヤ

「なんだ？」ムシヤムシヤ

「一夏の奴何人惚れさせてるんだ？」

「おれが確認したただけだと学園では3人以上・・・かな？」

「はは・・・」

「ちなみに今一夏に惚れてるのは全員で4人はいるし・・・」

「ほんとどうなるんだか」

「背中から刺されないといいけどね」

「だな」

「なあ拓海たち何はなしてるんだ？」

「鈍感野郎には教えん」

「鈍感ってwそこまで鈍感じゃねーぞ」

「十分鈍感だそれもキング・オブ・鈍感クラスの」

「————決めました」

「私来年IS学園を受験します」

「えーっと適正は？」

「AAA+です」

「あはははは。だったら企業所属になる？」

「僕のとこだったらコネあるけど」

「考えておいてね」

「分かりました」

「あ、そうだ御代を」

「いえ。タダでいいです」

「で、ですので一夏さんにはぜひ先輩としてご指導願いたいのです
が」

「ああ、いいぜ」。憂かったらな」

「あ、ありがとうございます!!」

「じゃあまた今度」「また来るね」

「はい。また」

「一夏、いる？」

「おう」

「いきなりあけないでよ！びっくりするでしょうが」

「な、何じつと見てるのよ」

「ああ、いやなんでもない」

「夕食食べに行かない？」

「ああ、今行く」

「ねえ、聞いた？」

「聞いた、聞いた」

「え、なんのはなし？」

「だから、あの織斑君と一之瀬君の話よ」

「いい話？悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？絶対これは女子にしか教えちゃ駄目だよ？女の子だけの話なんだから」

「実はね、今月の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か一之瀬君と付き合えるんだって」

「ん？なんだかあのテーブルえらい人ばかりだな」

・ ・ ・ ・ ・

「トランプか占いかやってるんじゃないの？それか優勝したら僕たちと付き合えるとかそういう偽の噂を流してるとかね・・・」

「あゝ一之瀬君だゝあの噂って本当？」

「嘘に決まってるよ」

「どんな噂か知ってるの？」

「『優勝したら僕たちのどちらかと付き合える』でしょ？あれだけ声が大きければ嫌でも聞こえるよ」

第9話

「やっぱりモルゲンレーテ製のがいいなあ」

「え？ やっぱり！ やっぱデザインと性能の両立が凄いよね」

「だよね」

「しかも値段は手ごろ」

「あ、織斑君と一之瀬君のISってどこの奴なの？」

「あー。特注品だって。男のISスーツがないからどっかのラボが作ったらしいよ。えーともとはイングリッド社のストレートアームモデルだって聞ってる」

「僕のはモルゲンレーテ製の量産型を少し改造したもの。まあ量産型と性能は変わらず、ちゃんと銃に撃たれても衝撃も何もないよ」

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検地することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小型拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることが出来ます。あ、衝撃は消えませんか？ あしからず」

「あー山田先生。モルゲンレーテ製のスーツは中型の拳銃の銃弾程度なら衝撃まで完全にとめれますよ？」

「あ、そうでしたね」アハハ

「山ちゃん詳しい!」

「一応先生ですから。・・・って、山ちゃん?」

「山ピー見直した」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。・・・って山ピー?」

「あの一、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと」

「えーいいじゃんいいじゃん」

「「「「まーやん」(マヤマ・マヤマ・山ちゃん・山ピー)は真面目っこだな」」」」

「はあ・・・もういいです」

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます」

「今日からは本格的な実践訓練を始める。訓練機ではあるが、モルゲンレーテ製の量産型第3世代機だ。各自気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学園指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは学園指定の水着で訓練を受けてもらう。それすら忘れたものは下着で構わんだろう」

「「（構うでしょ）」」

「では山田先生。HRを」

「は、はいっ」

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！なんと2名です」

「え・・・・・・・・」

「「ええええええええええ？」」」

「「失礼します」」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。そりゃそうだから

だって、二人とも男子だったんだから

「五反田 弾です。モルゲンレーテに所属しています。テストパイロットという名目で専用機を持っています

よろしく願います」

「シャルル・デュノアです。フランスから着ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしく願います」

「お、男・・・？」

「はい、こちらに僕と同じ境遇の人がいると聞いて本国より転入を
-----」

「きゃ・・・」

「はい？」

「キャ-----」

「男子！3、4人目の男子！」

「しかもうちのクラス」

「片方はクールでかっこいい！もう片方は美形！守ってあげえたく
なる系の！」

「地球に生まれてよかった~~~~~」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「ではHRを終わる。各人は直ぐに着替えて第2グラウンドに集合。
今日は2組と合同でIS模擬戦を行う。以上」

「織斑は五反田。一之瀬はデュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だ
ろう」

「分かりました」「了解」

「シャルル、早く行くよ。女子が着替え始める」

「とりあえず男子は空いているアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だからな。早めに慣れてくれ」

「分かった」

「ああ、もう。PIC使うか」

「え？校則違反じゃないの？」

「大丈夫だ。ISじゃない。ISの技術を応用したものだからノー問題」

「凄いなW」

「じゃあ行くよ」

「うん」

まっすぐと聞こえたが無視無視

「とうちゃーく」

「じゃあシャルル着替えよ」

「そうだね」

「じゃあ行くよーつかまっててね」

「うん」

「ふう着いた」

「あら？拓海さん。一夏さんたちは？」

「さあ？面倒なことになる前に逃げてきた」

「そうでしたの」

「一之瀬。なぜISを展開した」

「え？僕がいつISを展開しました？」

「教室から出て直ぐだ」

「ああ、あれはただのPICを応用して作った反重力装置ですよ。
まあ超小型スラスターとしての役割も有りますが」

「そうか。分かった」

「え？拓海。なんでそれで通じるの？」

「それはモルゲンレーテだから」

「・・・なんか妙に説得力あるね」

「でしょ？」

「まあいいや。並んでおいたほうがいいよ」

「そうする」

「織斑。五反田。35秒の遅れだ」

バシコーン

「それと五反田。今日は初めてだから見逃してやるが、次からはないと思え」

「分かりました」

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

「スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら」

「4人の男子の二人がいるだけで、相当人数が来るんだよ。特に新聞部が」

「ご愁傷様」

「アンタまた何かやったんじゃないの？」

声はすれど姿は見えず——ってほんとにどこだ？

「後ろにいるわよ、馬鹿！」

「——安心しろ。馬鹿は私の目の前にも二人いる」

バシーン

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

「くうう……。何かというと直ぐにポンポンと人の頭を・
・」

「二夏のせい一夏のせい一夏のせい……………」
・」

「今日は戦闘訓練を実演してもらおう。ちょうど活力があふれんばかりの十代女子もいることだしな」

「凰、オルコット。前へ出ろ」

「な、なぜ私まで」

「専用気持ちは直ぐにはじめられるからだ。いいから前に出ろ」

「だからってどうして私が」

「二夏のせいなのになんでアタシが・・・」

「お前ら少しはやる気を出せ。・・・あいつにいいところ見せられるぞ」ボソッ

「やはりここはイギリス代表候補生、私セシリア・オルコットの出番ですわね」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用気持ちの」

「それで相手はどちらに？ 私は鈴さんでも別に構わなくてよ」

「それはこっちのセリフよ。返り討ちよ」

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は・・・」

「あああああ退いてくださいー」

「ふう……。白式の展開がギリギリ間に合ったな。しかし一体何事？」

「？」

「あ、あのう織斑君……ひゃん」

「そ、そのですね。困ります。こんな場所で……いえ！
場所だけでなくですね！仮にも教師と生徒ですね」

「ああでもこのまま行けば織斑先生が義姉さんってことで、それは
それで魅力的な―」

「――ハッ!？」

「ホホホホ……。残念です。外してしまいましたは」

「……………」

「うおおおおお」

ご愁傷様

「はっ!」

「山田先生はああ見えても元代表候補生だからな。あのぐらいの射
撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし」

「さて、小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「あ、あの2対1で………?」

「いや、流石にそれは」

「織斑先生。流石にそれは一方的になるんじゃないですか?」

「別にいいだろう」

「手加減はしませんわ!」

「さっきのは本気じゃなかったしね!」

「い、行きます」

「さて、今の間に……そうだな。一之瀬、山田先生の乗っている
ISを説明しろ」

「分かりました。山田先生の乗っているISはモルゲンレーテ社製
の世界初の第3世代型の量産機、蒼き稲妻ブルーサンダーです

特にパッケージで高速機動タイプ、攻撃特化タイプ、攻撃タイプ、
防御特化タイプ、防御タイプ、高機動攻撃タイプ、バランスタイプ
の7タイプにでき、参加サードパーティがかなり多いです。また、
イメージインターフェイスはマルチロックオンシステムと誘導兵器
の2種類が有り、マルチロックオンシステムは一度に多くの敵を倒
す場合に。誘導兵器は追加でサポート用のAIをつけるようにする
と、さいだいで、20個まで一度に操作できるようになるはずだ
あ、それと織斑先生。やっぱり一方的になりましたよ?」

「ああ、そこまでいい。……そうだな。もう少しいくかと思っ

たんだが」

「これで諸君にも教員の實力が分かっただろう。今後は敬意をはらって接するように」

「専用機持ちは織斑、凰、オルコット、デュノア、一之瀬、五反田だな。ただ、五反田は専用機を昨日もらって一時進化はしたがそこからはしてないから、五反田以外の専用機持ちがグループになって実習を行う。五反田は織斑のところに入れ」

「各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれろ」

「一之瀬君、一緒にやろう」

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「デュノアくんの操縦技術教えて」

「この馬鹿どもが・・・出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！順番はさっき行った通りだ」

「まあいいや、みんな始めるよ。ブルーサンダーでいいよね。注意

点は特に無し。たっただまま降りても、自動で降りるようになってあるけど、普通に下がってから降りるように」

その後は特に何も無く終わった

途中、立ったまま降りた人が多く、一人目のときに、山田先生から、僕が載せてあげてくださいといわれましたが、そんなの関係有りません。自動で下がります（キリッ

シャルロットの班は大変そうだったな・・・

第10話

「シャルロット。何があったか話してもらえる？」

「うん・・・」

「拓海、僕が愛人の子っていうのは知ってるよね？」

「うん」

「実家・・・デュノア社の方からね、男装してIS学園に行けといわれたんだ」

「ってことは男子と偽り、日本に現れた特異ケースに接触。それに第3世代型のデータを集めるといったところか」

「そうだよ。拓海ごめんね」

「いいよ。シャルロットが悪いんじゃない。悪いのはデュノア社長なんだから」

「拓海、ありがとう。でもね、僕にはもう一つ秘密があるんだ。拓海だから教えるんだよ？」

「そうなんだ。ありがとう」ひよっとしてフラグ建ったの？

「ねえ拓海は転生って知ってる？」

「え・・・転生・・・」

「僕ね、実は転生者なんだ」

「そうなんだ」

「でね、僕の前世の名前は絹本 瑞樹っていうんだ」

「!!」

「そうなんだ」

「そういえば拓海はなんで転生って言っても驚かなかったの？」

「シャルロット、実は僕も転生者なんだ」

「前世の名前は上条 朋希」

「え?・・・朋希・・・ってあの朋希？」

「そうだよ。幼馴染の朋希だよ」

「え・・・嘘、本当に朋希なの!？」

「だから、そうだって」

「あれ?・・・ってことは・・・」

「うん・・・一緒に風呂に入ったときもほんとに恥ずかしかった」

「うん・・・僕もだよ」

「「はぁ・・・」」

「まあいいや、シャルロットはどうしたい？」

「え？でもどうせフランスに強制送還されて代表候補生の座を剥奪、そして牢獄入りだよ？」

「大丈夫。この学校にいる間は問題ないよ」

「え？なんで？」

「忘れたの？ I S 学園特記事項「本学園における生徒は、その在学中において、ありとあらゆる 国家・組織・団体に帰属しない。」」

「だからこの学校にいる間は問題ないよ。ここにいる間に何か策を考えればいいさ」

「そうだね。気が楽になったよ。ありがとう」

「あくでもその格好じゃあ、夕食いけないよなあ・・・」

「うん、じゃ「拓海、シャルル、いるか？夕飯食べに行こうぜ」

「あ、ちょっと待って。シャルルが体調悪いみたいなんだ。直ぐに行くから先に行行って」

「分かった、直ぐに来いよ」

「うん、直ぐに行くよ」

「シャルロット、ごめんね、夕飯取ってくるから」

「分かったよ」

「シャルロット、夕飯もってきたよ」

「ありがと・・・ッ」

「ああ、この体じゃあ、箸もてないのか・・・」

「うん・・・」

「フォークかなんか持ってくるよ」

「いいよ、がんばって食べるから」

ポロ、ポロ、ポロ

「もう、シャルロットも少しは甘えたらどうだ？」

「じゃあ、あのね？拓海が食べさせて？」

「え？ああ、うん分かった」

うう・・・上目遣い＋涙目は卑怯だよ・・・そんな事されたら断るに断れないよ・・・

うう・・・ドキッとする

「はい、あーん」

「あーん」

「どうだ？」

「おいしい」

「次は和え物がいいな」

「分かった。あーん」

「あーん」

「あ、シャルロット、お茶いる？」

「うん、もらうよ」

「ありがと——きやつ」

「あちち。水っ、水ッ」

「ごめん・・・大丈夫？」

「いや、大丈夫なんだけど、む、胸が当たってるんだけど・・・」

「当ててるの♪というネタは置いて・・・」

「拓海のえっち・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」ズドーン

「ん？どうしたの？」

「いや・・・」

「その・・・む、胸が見えそうなんだよ・・・」

「だから、その・・・チャックを上げてくれ」

「ひょっとして見たいの？拓海のえっち」

「まあ、確かに見たいけど・・・ってそうじゃなくて駄目だろ。シヤルロットみたいな可愛い子がそんなこと言っちゃ」

「え？可愛い？僕が」

「可愛いでしょ。どう見ても」

「そう？えへへへへ」

「それじゃあもう寝るよ。シヤルロットお休み」

「お休み」

「もう・・・見たいなら見たいって言ってくれればいいのに・・・
前世の時から好きだったし、今も好きだし・・・ね」

第10話（後書き）

さて、一之瀬 拓海今すぐそこを変われ、俺だって、俺だって、シヤルにキスしてもらうんだあああああああ

拓海「あー作者が暴走してるので終わります」
シヤル「じゃあね」

第11話

「えー今日は昨日転入するはずでしたが、一日遅れた人が着ます」

「入ってきてください」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「えーっと他には」

「以上だ」

「・・・ツ貴様が」

ボーデヴィツヒが一夏を殴った。何故だ？ よしこういうときの原作知識だ

・・・あゝなるほど。一夏が誘拐されて織斑先生が決勝戦を棄権して助けに行ったと
そういうことねーつまり逆恨みかw

キングクリムゾン 時間設定、織斑先生を連れ戻そうとする所

「教官！何故このようなところで教師をしているのですか！」

「やれやれ・・・」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか」

「お願いです教官。我がドイツ軍で再びご指導を。ここではあなたの能力を半分も生かされません。」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教える意味などある人間では有りません」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違いしている」

「そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど勿体

無いです」

「――そこまでにしておけよ、小娘」

「っ・・・・・・・・・・！」

「少し見ない間に偉くなったな。15歳で選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は・・・・・・・・・・」

「さて、授業が始まる、とつとと教室に戻れよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さて、織斑。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

「何でそうなるんだよ！大体拓海もいるだろ、千冬姉」
バシーン！

「学校では織斑先生と呼べ。一之瀬はいないぞ」

「は・・・・はい」拓海め・・・・逃げやがったな

「そら、走れ劣等生。このままじゃお前は来月のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

「分かってるって千冬姉」
バシーン

「何度言わせるつもりだ。織斑先生だ」

「すみません。じゃあ教室に戻ります」

「おう。急げよ。――――あぁ、それと織斑」

「はい？」

「廊下は走るな………とは言わん。ばれない様に走れ」

「了解」

――――

放課後までキングクリムゾン

――――

「さてと、第3アリーナで自主訓練するか」

「つてあれ鈴とセシリアじゃなか！ダメージレベルがもう直ぐでCを超える！というか超えてる！」

『織斑先生聞こえますか？現在第3アリーナで代表候補生3人が模擬戦中。その内、鈴とセシリアのダメージレベルがCを超えました。このままではレッドゾーンに突入します。時間は稼ぎますから早く来てください』

『分かった』

イグニッションブースト
『瞬時加速』

「はああああああ。やめろおお」

カキンカキンカキンカキン

「一夏聞こえるな。早く第3アリーナに來い。訓練するために近くまで来てるんだろ？。ボーデヴィツヒとの模擬線で鈴とセシリアのダメージレベルがCを超えてるから早く保健室に連れて行け」

「分かった」

「離せ」

「ふっ雑魚が一匹増えた位で変わらん」

「鈴、セシリア聞こえるか？今一夏がこっちに向かってきてるはず

だから、一夏に保健室に連れて行ってもらえ」

「「分かった」」

「鈴、セシリア、大丈夫か？」

「大丈夫じゃない。早くしなさいよ」

「私ですわ」

「逃がすかアアア」

ガキンッ！

「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「ふう・・・やっと来た。まあ早いですけど」

「模擬瀬をやるのは構わん。だがダメージレベルがCを超えたISがあるとするば、教師として黙認できん。この決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそうおっしゃるのなら」

「織斑、デュノア、一之瀬、お前たちもそれでいいな」

「あ、ああ」

「教師には『はい』で答えろ。馬鹿者」

「は、はい」

「僕もそれで構いません」

「構いません」

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「別に助けてくれなくて良かったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「お前らなあ……。はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

「こんなの怪我のうちに入らな————いたたた」

「そもそもこういつて横になっていること事態無————つううつ！」

馬鹿なんだろうか

「馬鹿って何よ馬鹿」

「一夏さんこそ大馬鹿ですわ」

「なんでそうなるんだよ」

「好きな人に格好悪いとこ見られたから恥ずかしいんだよ」
「だよなあ」

「ん？どういうことだ？」

「なななな、何を言ってるのか全っ然っ分かんないわね！こここここれだから欧州人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別に私わっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきますしょう！」

ドドドドドドドドドドドドドドドド

「織斑君！」

「五反田君！」

「一之瀬君！」

「デュノア君！」

「「「これ」」」

「えーっと何々？『今月開催する学年別トーナメントではより実践的な模擬戦を行うため、二人組みでの参加を必須とする。締め切りは――――』」

「ああ、そこまでいいからとにかくっ！」

「私と組もう織斑君」

「私と組んで五反田君」

「私と組んでよね一之瀬君」

「やっぱり私だよね？デュノア君」

「いや、俺は弾と組むから」

「僕はシャルルと組むから」

「まあ、そういうことなら……………」

「他の女子と組まれるよりはいいし……………」

「男同士っていうのも絵になるし……………ごはんごはん」

「ふう……………」

「あ、あの一夏—————」

「一夏っ」

「一夏さん！」

「あたしと組みなさいよ！幼馴染でしょうが」

「いえ、クラスメイトとしてここは私と」

「駄目ですよ」

「二人のISはダメージレベルCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメントに参加することは許可できません」

「うう・・・分かりました・・・」

「不本意ですが・・・非常に！非常にっ！・・・不本意ですが！トーナメント参加は辞退します・・・」

「あ、あのね、拓海っ」

「なに？」

「あの、遅くなっちゃったけど・・・助けてくれてありがとう」

「うん？僕何かした？」

「ほら、保健室で。トーナメントのペアを言い出してくれたの、凄くうれしかった」

「いや、気にしないでいいよ……それに好きな子と組めてうれしかったし（ボソッ

「え？拓海、なんていったの？最後のほう」

「え？あ、いや。なんでもないよ？」

「そっか。じゃあいいけど」

「ところでさあ、シャルロット、僕しかいないときは、無理に男口調にしなくてもいいよ？僕はどっちでもいいんだけどね」

「う、うん。僕——私もそう思うんだけど、ここに来る前に徹底的に正体がばれないようにするために叩き込まれたから、離れないんだ」

「そっか……ごめんね。変なこと聞いちゃって」

「で、でも、その……やっぱり女の子っぽくない、かな？」

「自分のことを『僕』って言うとか？」

「そ、そう。女の子っぽくないんだったら、拓海と二人きりのときだけでも普通に話せるようにがんばるけど」

「いや、無理はしなくていいよ。それに女の子っぽくないとか、そういうことはないよ。僕は、シャルロットは可愛いと思うよ？」

「か、可愛い？……僕が？……ほんとに？嘘ついてない？」

「ついてないよ。ほんとに可愛いよ」

「そ、そう……なんだ。——うん、じゃあ、別にいいかな」

「あ、そういえば制服のままだったね、着替えよっか」

「そうだね」

「あ、僕外に出てるよ」

「えっ？どうして？」

「いや、僕がいたら着替えられないでしょ？ISスーツの着替えも難儀してたし、しばらく外に出てるよ」

「いや、いいよ、そんなの拓海に悪いし、その……僕は気にしないから」

「いや、遠慮しなくてもいいよ」

「そ、それに男同士なのに着替え中は部屋の外に出たりしたら、変に思われるかもしれないでしょ？」

「それもそうだね」

「じゃあ、僕も着替えることにするよ」

「うん、そうして」

(う・・・まずい、シャルロットはかわいいし・・・意識しちゃう・・・」

「きゃんっ!」

「いたた・・・・・・・・。足が引っ掛かっちゃった・・・・・・・・え?」

「え?」

「「え」」

「きゃ——」

「ちょ。シャルロット大声出したら駄目だって」

「ごめん・・・ってええ」

「ん?・・・ええ」

「シャルロットごめんね」

「拓海、見た?」

「み、見てない、見てないよ」

「じゃあ下着の色は?」

「水色・・・」

「やっぱり見たんだ・・・／＼／＼」

「ごめんね・・・シャルロット・・・／＼／＼」

「じゃあ電気消すね？」

「うん。分かった」

「ほんとずるいよ。拓海は。こんなのだから好きになっちゃうんだよ／＼／＼」

「おやすみ、拓海・・・」

第12話

「しかし、すごいなこりゃ・・・」

「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。1年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「まあ男性操縦者にはチェックが入ってるだろうけどね。」

「一夏はボーデヴィツヒさんだけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

「自分の力を試せもしないってのは正直つらいだろ」

「でも感情的になるなよ？お前はいつも感情的になって負けてるだろ」

「あ、対戦相手が決まったみたいだから早くいこ」

「そうだね」

「」「」「え？」「」

『Aブロック第1試合 五反田 弾&織斑一夏VSラウラ・ボーデ
ヴィツヒ&篠ノ之 箒』

『試合開始』

「叩きのめす」

「おおおお！」

「ふん・・・」

『AIC?なあ、拓海、AICって何だ?』

『シュヴァルツェア・レーゲンの第三世代型兵器。アクティブ・イ
ナーシャル・キャンセラーの略。感性停止能力』

『まあ簡単に言うと、相手の動きを止めるようにする装置だよ。た
だ集中力がかかりすぎる』

「開幕直後の先制攻撃か。分かりやすいな」

「なに、こっちは囧なんでね」

「なに!?!」

「よお一夏。箒は倒したぜ」

「おし、じゃあ行くか」

「だな」

「私が次にどうするかは分かるだう」

「させないね」

「これなくんだ。正解はシールドピアースの上位版。普通だったら
1発食らえば終わりだよ?」

バコーン

「そんなもの効かん」

「それはどうかな?」

「なっ拡散しただと!?!」

「ちなみに拡散した一つにでも当たるとゲームオーバーだよ?」

『一夏、いまだ』

『分かった』

はあああああ

『零落白夜』

シールドエネルギー残り40

『こんなところで負けるのか、私は・・・・・・・・・・!』

『私は負けられない! 負けるわけにはいかない・・・・・・・・・・!』

『どうしてそこまで強いのですか? どうすれば強くなれますか?』

『私には弟がいる』

『弟・・・・・・・・ですか』

『あいつを見ると、分かるときがある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな』

『・・・・・・・・よく分かりません』

『今はそれでいいさ。そうだな。いつか日本に来ることがあるのなら会ってみるといい。・・・ああ、だが一つ忠告しておくぞ。あいつに—————』

だから————許せない。教官にそんな表情をさせる存在がそんな風に教官を変えてしまう男、それを認められない。認めるわけにはいかない
だから—————

敗北させると決めた。あれをあの男を。私の力で、完膚なきまでに叩き潰すと

ならば————こんなところで負けるわけにはいかない。あの男は、

あれは、まだ動いているのだ。——動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない
そのために私に最強の力をよこせ

Damage Level……D.
Mind Condition……Uplift.
Certification……Clear.

《Valkyrie Trace System》……boot.

「あああああああっ！……！！」

「ぐっ！一体何が……！！」

「なっゆ、雪平！？」

「なんだよあれは……！！」

「………がどうした………！！」

「それがどうしたあっ！……！！」

「うおおおおおおおっ！……！！……！！」

「馬鹿、シールドエネルギーがもうほとんど無いだろ！！」

「それでもいかないといけないんだ。アレはあれは千冬姉だけの刀なんだ!!」

「はぁ・・・仕方ねえな。コア、バイパス接続。エネルギーの流出を許可。」

一夏、もし負けたら、明日から1週間。女子の格好で通ってもらうぞ」

「なっ・・・・・・・・・・い、いいぜ？なにせ負けないからな」

「ぎ、ぎ・・・・・・・・ガ・・・・・・・・」

強さとは――なんなのか

『強さっつーのは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思うことじゃないかと俺は思う』

・・・・・・・・・・そう、なのか？

『そりゃそうだろ。自分がどうしたいかわからないと強い弱い以前に歩き方を知らないってことだろ』

・・・・・・・・・・歩き・・・・・・・・方・・・・・・・・・・。

『どこへ向かうか。どうして向かうか。さ』

・・・・・・どうして向かうか・・・・・・。

『つまり、やりたいもん勝ち。えんりょうとか、我慢とか、そんなぞ?。』

略

「う、あ・・・・・・」

「気がついたか」

「私・・・・・・は・・・・・・?」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらく動けないだろう。無理をするな」

「何が・・・・・・起きたのですか?」

「ふう・・・・・・一応、重要案件である上に機密事項なんだから」

「VTシステムは知っているな？」

「はい」

「そのVTシステムがお前のISに搭載されていた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「巧妙に隠されていたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意思・・・・いや願望か」

「それがそうと発動するようになっていたらしい。今、ドイツ軍関係者は取調べを受けているだろう」

「私が・・・望んだからですね」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ！」

「お前は誰だ？」

「わ、私は・・・・・・・・私・・・・・・・・は・・・・・・・・」

「誰でもないならちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「この学校には後最低3年は在籍しなければならない。その後も死

ぬまで時間はある。たっぷり悩めよ15歳」

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああ、それから。お前は私にはなれないぞ」

「あいつの姉はこう見えて心労間が絶えないのだ」

「ふ、ふふ・・・・・・・・・・ははっ」

『トーナメントは事故により中止されました。ただし、今後の個人データ指標と関係するため、全ての第1試合は行います』

『場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上――――』

「やっぱりシャルルの言うとおりになったな」

「そうだねえ。あ、拓海、七味とって」

「はいよ」

「ありがとう」

「ふー、ごちそうさま。学食といい寮食堂といいこの学園は本当に料理がおいしくて幸せだよなあ、シャルル」

「ほんとにそうだね。この値段でこの美味しさだもんね」

「優勝・・・・・・・・チャンス・・・・・・・・消え・・・・・・・・」

「交際・・・・・・・・無効・・・・・・・・」

「・・・・・・・・うわああああんっ」

「どうしたんだろう」

「さあ・・・・・・・・？」

「そういえばさ簾先月の約束だが、付き合ってもいいぞ」

「――――。――――、なに」

「だから、付き合ってもいいって・・・・・・・・おわっ!？」

「ほ、ほ、本当か? 本当に、嘘ではないのだな!」

「お、おう」

「な、なぜだ? り、理由を聞こうではないか・・・」

「あ、男子のみんなここにいましたか。さっきはお疲れ様でした」

「山田先生こそ。ずっと手記で疲れなかったですか？」

「いえいえ、私はああいうの昔から得意だったので問題ありませんよ」

「朗報です。何とですね！今日からついに男子の大浴場が解禁です！」

「そうなんですか！？てっきり来月からになると思ってたんですが」

「それがですねー今日はボイラー点検があつたので、生徒たちが使えない日なんです」

「でも点検自体は終わったので、それなら男子のふたりに使ってもらおうって計らいなんです」

「ありがとうございます」

く部屋く

「あ、そうだ一夏、弾」

「「なんだ？」」

「ごめんね」

バコン

「「な、なにするんだよ」」

「悪く思わないでね」

く大浴場前く

「ああ、一之瀬君、デュノア君。きましたか。あれ？織斑君と五反田君は？」

「ああ、部屋でちょっと寝てるみたいです」

「そうですか。分かりました。じゃあごゆっくりどうぞ」

「ありがとうございます」

「シャルロット、僕はいから、シャルロットが入ってきなよ」

「いや、悪いよ。拓海が先に入りなよ。僕は拓海が出てきてから入るからさ」

「分かった。ごめんねシャルロット」

「ううん、気にしないでいいよ」

ガラガラガラガラ

「お邪魔・・・します」

「シャルロット？」

「あんまりこっち見ないで。拓海のえっち」

「あ、ご、ごめん」

「僕が一緒だと、嫌？」

「ううん、違う」

「でももう十分に堪能したから出て行くよ」

「まって・・・その大事な話があるの。拓海に聞いてほしい」

「分かった」

「その・・・前に言ってたことなんだけど」

「前って言う・・・学園に残るって話？」

「そ、そう。それ。僕ね、ここにしようと思う。僕はまだここだっ
て思える居場所を見つけれないし、それに」

「それに？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぴちゃん

「きゃあっ」

「ど、どうした!？」

「水滴が落ちてきてびっくりしただけ」

「そうなんだ。良かった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「シャルロット？」

「こっち見ちゃ駄目! あっち向いてて」

「ご、ごめん」

「シャ、シャルロット——」

「拓海がここにいろって言うてくれたから、そんな拓海がいるから、
僕はここにいたいと思えるんだよ?」

「そ、そうか」

「それにね、もう一つ決めたの」

「もう一つ……?」

「そう。僕のあり方。拓海が教えてくれたんだよ?」

「そうだっけ?」

「そうだよ。ふふっ。拓海って自分に関することって、他のみんなよりはいいけど鈍感だからね」

「ごめんね……」

「いいよ。許してあげる」

「あ、あのシャルロット。あ、あのいつまでもこの体勢だと……
・その……り、理性がいつまで持つか分からないんだ」

「あ、ああっ、うんっ! そうだねっ!、僕体と髪あらっちゃうね」

「こ、こっち覗いちゃ駄目だよ」

「の、覗かない……というより除けないよ」

「あはは、拓海らしいね」

「じゃあ戻るか」

「うん」

「今日は、皆さんに転校生を紹介します。転校といいますが、既にご紹介が済んでいるといえますか・・・ええと」

「じゃあ入ってきてください」

「失礼します」

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということです。はあぁ・・・また寮の部屋割りを組み立てなおす作業がはじまります・・・」

「え？デュノア君って女・・・？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったのね」

「って織斑君、同室だから知らないってことは――」

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね」

「一夏あつ——!!」

「死ね——!!——!!——!!——!!」

「ふーっ、ふーっ、ふーっ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「助かったぜ、サンキュ。…… っていうかお前のISもう直ったのか? すごいな」

「・・・・・・・・・・ コアは辛うじて無事だったからな。予備パーツで組みなおした」

「へーそうなん——— むぐっ!?!」

「!?!?!?!?!?!」

「お、お前は私の嫁にする。決定事項だ。異論は認めん」

「だが断「ることは許さん」・・・・・・・・・・」

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な慣わしだと聞いた。故にお前を私の嫁にする」

「シャルロット、ちょっと手につかまって」

「? 分かった」

「説明してもらいたいのはこっちだ」

「ちょ弾助けてくれ」

「☆I☆YA☆DA☆」

「そ、そんな」

「さて、お前たちどういいうことか説明してもらおうか」

「はい、僕とシャルロット以外の専用機持ち全員がISを展開し、一夏に攻撃を仕掛けました」

「理由はおそらく、HRのときにラウラにキスをされたからだと思っています」

「また、箒も、真剣で一夏をきりつけようとしていました」

「僕とシャルロットは混乱が凄かったので、モンゲンレーテの作ったPICを応用した装置と光学迷彩及びステルスを使い、宙に浮いてました」

「分かった。一之瀬とデュノア以外の専用機持ちと篠ノ之は後で反省文500枚を提出しろ」

『わ・・・・・・・・分かりました』

その日文字通りクラスが、いや学校が揺れた

第13話

「拓海、ゴメンね、手伝ってもらってさ」

「いや、いいよ」

「でも、良かったの？今日はセシリアたちと街に行く予定だったんでしょ？」

「いいんだよ。大体、シャルロットがいらないんなら行ってもしょうがないしね」

「えっ？」

「まあ、なんだ。プリントの手伝いでも、好きな相手と一緒にの方がいいってこと／＼」

「拓海」

「シャルロット」

「・・・・・・・・・・・・・・・・夢」

（ああ、後10秒ぐらい見れてたらな）

（が、学校の廊下でなんて・・・）

（ぼ、僕は何を考えてるんだろう）

「あれ？ラウラはどこに行ったんだろう？」

「・・・・・・・・まあいや」

「この大馬鹿どもがあ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！！」

「ん？ 箒何やって・・・」

「ごゆっくりどうぞ」

「わあああ、ち、遅刻っ、遅刻する」

「ち、遅刻する」

「珍しいな、二人とも。寝坊なんて」

「た、たまたまだよ」

「いただきます」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「二人とも、先に行ってるぞ」

「じゃあな」

「じゃあな」

「はぁ・・・シャルロット、遅刻するから早く食べよう」

「そうだね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「「ごちそうさま」」

キンコンカンコン

「やばいシャルロット、遅刻するぞ」

「早くいこ。つかまって」

「うん」

「拓海、飛ぶよ」

「え？」

「到着っ！」

「おう、ご苦労なことだ」

「本学園はISの操縦者育成の為に設立された教育機関だ。そのためにどこにも属さず、故にあらゆる外的権力の影響を受けない。が、しかし敷地ないでも許可されてないISの展開は禁止されている」

「意味は分かるな？」

「「は・・・はい・・・申し訳ございません」」
スパパーン

「デュノアと一之瀬は放課後教室を掃除しておけ。二回目反省文提出と特別教育室での、生活をさせるのでそのつもりでな」

「「はい・・・」」

「今日は通常授業の日だったな。IS学園生とはいえお前たちも扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

「それと、来週からはじまる郊外特別実習期間だが、全員忘れ物な

どするなよ。3日間だが、学園を離れることになる」

「自由時間では羽目はずしすぎないようにな」

～放課後～

僕たちは今、罰で掃除をしている

「シャルロット、無理するなよ。机運びは僕がやるから」

「大丈夫だよ。これでも専用機もちなんだし、体力は人並みに――
――きや」

とっさにシャルロットを支える

「シャルロット。大丈夫か？」

「うん、平気だよ。ありがとう」

「お礼をされるほどのことはしてないよ」

「ふう～終わった～シャルロット。お疲れ様」

「そっちこそお疲れ様」

「あ、そうだ。シャルロット。週末の日曜日用事ある？」

「いや、ないよ？」

「そっか。じゃあ買い物に行かない？ 確かシャルロットって水着無かったでしょ」

「うん」

「あ、そうだこれ渡しとくよ」

「えっと・・・なに？ これ」

「モルゲンレーテのISの量子変換を応用したやつだよ。これだったら荷物は持たないで済むしね」

「ありがとう」

〳日曜日〳

「シャルロットお待たせ」

「ううん。そんなに待ってないよ。あれ？ 何でIS学園の制服なの

「？」

「そのほうが絡まれる可能性も低くなるからだよ」

「そういうことか。モノレールのろ？」

「そうだね」

「そういえばさ、何で僕を誘ってくれたの？」

「シャルロットが水着を持って無いのは知っていたから、一緒に買
いに行こうと思ってね……。それに好きな人と一緒に行きた
かったというのもあるけどね」（ボソ

「そっか」

「あ、そうだシャルロット、手つながない？」

「そうだね」

「なあ、シャルロット、もうシャルロットって名前みんな知って
るし、二人だけの名前なんか考えないか？」

「え？ほんと？うん」

「そうだな〜シャルなんてどうだ？」

「シャル、うん、いいよ、すっごくいい」

「そっか良かった」

「あ、そうだ、ちょっと待って」

「えーっと鈴とセシリアと一夏とラウラと箒がつけてきてるな。よし、メール送る」

「分かった」

差出人

一之瀬 拓海

本文

つけてくるのやめてくれる？

迷惑なんだけど

まだつけてくるのならあとでOHANASHIするからね

そういうことだからつけてくるのやめといてね

「シャル、つけてきてた人たちにメール送ったよ」

「ありがとう」

「さ、行く」

「うん」

「あ、ここでシャルとは一旦お別れだな。30分後にここでいい？」

「うん」

あ、そうだアクセサリ買っておこ

後ついでに箒の誕生日プレゼントも買っておかないと

「シャルお待たせ・・・というよりも水着えらんだの？」

「いや・・・その拓海に選んでもらおうと思って」

「そっか。分かった」

「シャル、これなんてどう？」

「うん、いい、すっごくいいよ。これにするね」

「うん。あ、僕が払っておくよ」

「えーいや、悪いよ」

「大丈夫だって・・・それにデートみたいなもんだしね」

「うん・・・分かった」

「ちょっとあなた。そこのあなた」

「僕ですか？」

「そうよ。これ片付けといってね」

「自分で片付けたらどうですか？あなたのやったことでしょう」

「なっあ、あなたの立場がどんなものか知っているの！？」

「ええ、知ってますよ。あなたよりもかなり上ということがね」

「へーあなたそんなこと言うんだ。私が誰だか知ってるの！？女よ
お・ん・な男は女に逆らえないの知ってるの！？」

「ええ、普通の男でしたらね」

「ちょっと警備員さーん。この男が暴力を振るってきました」

「はい。とりあえずあなたの身分証明書を出してもらえますか？」

「ええ、分かりましたえーっとありました」

「なっ I S 学園」

「あなたの立場分かってますか？あなたの方が断然低いってことです」

「急いめますので失礼します」

「シャル、ごめん待たせたね」

「ううん、大丈夫だよ」

「あ、千冬さん、山田さんこんにちは」

「ああ、拓海か。ここは女性用の水着売り場だぞ何をしている」

「いえ、シャルの水着を選んであげただけですよ。それと一夏と鈴と一緒に更衣室に入っていったのを見かけたんですが大丈夫ですか？」

「大丈夫だろう。どうせ直ぐにぼろを出すだろうしな」

「そうですね。じゃあ僕たちはこれで失礼します」

〽臨海学校初日〽

「そろそろも目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

「それではここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員従業員の仕事を増やさないように注意をしろ」

「」「よろしくお願いします」「」

「はい、こちらこそ。今年の一年も元気があってよろしいですね」

「あら、こちらが噂の・・・？」

「ええ、まあ今年は男子が二人いるせいで浴場分けが難しくなって申し訳ございません」

「いえいえ、そんな。それにいい男の子たちじゃないですか。しっかりしてそうな感じを受けます」

「一之瀬 拓海です 3日間よろしくお願いします」

「感じがするだけですよ。挨拶をしろ、馬鹿者」

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「あらあら、織斑先生ったら、弟さんにはずいぶん厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので」

「それじゃあ皆さん、お部屋にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用ください。場所が分からなければ従業員にお聞きください」

「ねーねーおりむーたっくんとだっくん」

「おりむーとたっくんとだっくんの部屋ってどこなの？一覧に書いてなかったしー遊びに行くから教えてー」

「いや、俺たちもまだ聞いてないんだ。ひょっとしたら廊下で寝るのかも」

「あははー廊下ー冷たくて気持ちーよー」

「織斑、お前達の部屋はここだ」

「ああ、教員室の隣ですか。確かにここならうるさかったら、直ぐに聞こえますもんね」

「そういうことだ」

「じゃあ泳ぎに行ってきます」

「ああ、行ってこい」

「なあ、箒、これってやっぱり・・・」

「知らん。私は知らん。抜くなら勝手に抜け」

「あれ？一夏さん、何をなさっているで・・・きゃなにするん・・・で・・・す・・・の・・・」

「ちょっと早く逃げないと危ないですわ」

「そうだな」

「ん？一夏何やってるの？」

「ああ、うさぎが降りてくる」

「うさぎ？ああ、あの人か」

ズドオオオオン

「「に、にんじん」」

「やあやあいっくんにたっくん久しぶりー」

「「お久しぶりです。束さん」」

「うんうんほんとにおひさだねー。それはそうとたっくん。あの自動お着替え機と量子変換バッグはコア使ってるでしょ」

「ええ、使ってますよ。ただ取り出そうとしたら爆発しますけどね」

「あははーそれならいいや。さすがたっくん私と同じぐらい天才だね」

「ありがとうございます」

「あの一夏さん。あの方は誰ですか？」

「束さん・・・篠ノ之束博士だ」

「篠ノ之博士って・・・ISの開発者の!？」

「そう。その束さんだ」

第13話（後書き）

一日に3回更新

疲れたゝ

第14話

「わゝミカってば胸おっきー。また育ったんじゃないの？」

「きゃあ！もう！」

「ティナって水着だいたーん。すっごいね。」

「そうでもないよ。アメリカなら普通だよ？」

「なあ、一夏。こういう話やめて欲しくない？」

「ほんとそうだな」

「あ、織斑君と一之瀬君とだ」

「う、うそっ！わ、私の水着変じゃないよね。大丈夫だよね」

「わ、わゝ体かっこいゝ。鍛えてるね」

「織斑君ゝ一之瀬君ゝあとでビーチバレーしようよ」

「時間があればね」

「時間があつたらな」

「い、ち、か~~~~~~~~~っ！」

「ちょ。鈴何するんだよ」

「あゝ高い高いゝ。え？何してるかって？移動監視塔ごっこ」

「鈴さんなにをしてらっしゃいますの？」

「だ・か・ら肩車。もしくは移動監視塔ごっこ」

「というか鈴、早く下りてくれよ」

「いや」

「だったら海に放り投げるか」

「い、いやゝトラウマなの知ってて言ってるでしょゝ」

「当たり前」

「・・・・・・・・・・・・・・・・分かったわよ。降りるわよ」

「あ、そうだ一夏さん。サンオイルを塗っていただけませんか？」

「ああ、それぐらいなら」

「ではお願いしますは、一夏さん」

「あ、ああ。塗るぞ」

「ええ、お願いしますわ」

「きゃっ冷たっ」

「い、一夏さん。て、手で暖めてから塗っていただけませんか?」

「あ、そ、そうなのか。すまん初めてだったから」

「は、初めてでしたの。な、なら仕方ありませんわね」

「せ、背中だけでよかったよな」

「え、えっと足と・・・その・・・お、お尻の方も」

「断る」

「あゝはいはい。一夏向こう行ってて良いわよ」

「そ、そうかありがとう」

「さゝ私が隅から隅まで塗ってあげるわよ」

「あ、きゃ、り、鈴さんやめて。きゃっ冷たい」

「あゝここも塗らなくちゃね」

「ふう〜終わったわよ〜」

「もう・・・鈴さんのせいで酷い目に会いましたわ」

「よし一夏、向こうのブイまで競争よ。負けたら@クルーズのパ
フェおごりなさいよ」

「あ、分かった」

「よいドン」

「!?!?ごぼぼっ!」

い、一夏たすけて!お願い」

「鈴?・・・鈴!?!」

「鈴、大丈夫か!?!」

「うう・・・何とか・・・」

「無理するなよ」

「う、五月蠅いわね」

「五月蠅いって・・・人がせっかく心配してやってんのに」

「そ、その・・・ありがとう」

「まあ、別に礼はいらないけどなw」

「はあ、もういいわ」

「鈴、とりあえず休んだら？」

「だ、大丈夫よ」

「いえ、休むべきですわ」

「そうだぞ！休むべきだ」

「さあ、鈴さん行きましょう」

「そうだ！行くぞ」

「あ、一夏こんなところに居たんだ」

「ああ、シャルロットか。っていうかそのバスタオルお化けはなに？」

「わ、私だ」

「ラウラか。それ脱いだら？」

「大丈夫だよ。ラウラ。似合ってると思うよ」

「だ、大丈夫かどうかは私が決める」

「大丈夫だろ。見せてくれよ」

「よ、嫁がそういうのなら見せてやろう」

「ど、どうだ／＼／＼お、おかしいだろ」

「いや、おかしくないぞ。可愛いよ」

「でしょ？可愛いよね」

「ああ、可愛いよ」

「あ、拓海。僕の似合う？」

「うん。似合ってる。可愛いよ」

「えへへ／＼そっか／＼ありがとう／＼」

「ねーねービーチバレーしようよ／＼」

「ああ、そうだな・・・・・・・・・・って・・・・・・・・・・」

「どうした？これで終わりか？」

「え／＼と織斑先生なにやってるんですか？」

「ああ、今は1VS1でビーチバレーの勝負をしているんだ」

「どうだ？やるか？」

「ええ、まずは僕から行きます」

「サーブはくれてやる」

「ありがとうございます」

「デバイスセットアップ」

「スターライトブレイカー」

「甘い。デバイスセットアップ」

「反射」

「なら。スターダストブレイカー！！」

「うぐ……こうなったら……爆裂パンチ」

「効きません。ファイアトルネード」

「ぐ………一生の悔い無し………グハ」

「やった……勝った………」バタ

「お、おい大丈夫か？」

「大丈夫だ！問題ない」

「ちょ・・・拓海、復活早すぎるよ」

「そう？普通だけど」

「7時30分頃」

「うん、おいしい！昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だね」

「そうだね。ほんと、IS学園って羽振りがいいよ」

「しかも、このわさび本わさだよ。こんなの普通高校生じゃでないよ」

「拓海、本わさって？」

「ああ、シャルは知らなかったか。本わさっていうのは本物のわさびをおろしたものを本わさっていうんだ」

「え？じゃあ学園の刺身定食のは？」

「あれは練りわさ。原料はワサビダイコンとかセイヨウワサビとかいうのだよ。着色したり、合成したりしてるんだ」

「へーそうなんだ。じゃあこれが本当のわさびなんだね」

「そう。でも最近のやつは美味しいのも多いよ」

「そうなんだ。はむ」

え？・・・いま・・・わさびの山を食べなかったか？

「っ~~~~~~~~~~~~~~~~!!」

「シャ、シャルお茶」

「ありがとう」

「だ、大丈夫？」

「ら、らいひょうふ・・・」

「ふ、風味がひやっておいひいよ・・・」

「そこまで優等生しなくてもいいんじゃない？」

くー夏サイドくー

「大丈夫か？セシリア。顔色良くないぞ？」

「だ・・・・・・・・い・・・・・・・・じょ・・・・・・・・う・・・・・・・・ぶ・・・・・・・・
ですわ・・・・・・・・」

「セシリア、正座が無理ならテーブル席の方に行ったらどうだ？」

「うちのクラスからでも何人も行ってるぞ？」

「へ、平気ですわ……。この席を獲得する労力に比べれば、このくらい……」

「一夏、少しは女心理解してみたら？」

「そんなの、拓海はわかるのか？」

「だれでも多少はわかるよ」

「そうなのか？」

「はぁ……この鈍感が」

中略

「セシリア、あとで織斑先生の部屋に来てくれないか？」

「わ、分かりましたわ」

「ふーさっぱりした」

なんと海を一望できる露天風呂を2人で使えるのだ

『千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？』

『そんな訳あるか、馬鹿者。——んっ！す、少しは手加減しろ』

『はいはい。んじゃあここは・・・・・・・・っ』

『くあっ！そ、そこは・・・・・・・・やめっ、つつ』

『直ぐによくなるって。大分たまってるみたいだしね』

『あああっ』

『じゃあ次は』

『一夏、少し待て』

バンッ！！

「」「」「」

「なにをしているか、馬鹿者共が」

「は、はは・・・」

「こ、こんばんは、織斑先生」

「さ・・・・・・・・さようなら、織斑先生」

「盗み聞きは感心しないが、ちょうどいい。入っていき」

「」「えっ」

「ああ、そうだ。他の二人——ボーデヴィツヒとデュノアも呼んでこい」

「は、はいっ」

「おお、セシリア遅かったじゃないか。じゃあはじめようぜ」

「え？あ、あの織斑先生もいらっしやいますし、その・・・・・・・・」

「？別にいいじゃないか。俺も体があったまってるし、早く始めよう」

「い、いえ、でも、こういうのは、その、ふいんきが・・・」

「・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「セシリア、うつ伏せじゃないとできないぞ」

「え？え？う、うつ伏せでしますの？」

「うん」

「そ、そうですか」

「じゃあはじめるぞ」

「は、はいっ」

「ん、しょっ・・・・・・・・」

「！？いたた、いたたたたたた、い、いい、一夏さん何をして
————あううううっ！」

「何って、指圧」

「し・・・あつ・・・・・・・・？」

「そう、腰の」

「腰の・・・・・・・・」

「え、ええと一夏さん部屋に誘ったのは、もしかしてこの・・・」
「」

「おう。マッサージをサービスしてやろうと思ってな。セシリアって班部屋だろ？それじゃあ落ち着かないと思ってな」

「ぶ、無様です私」

「う？ど、どうした。そんない痛かったか？」

「ええ、とても・・・致命的なほどに・・・」

「そ、そりゃ悪かった。すまん優しくする」

「もう何でもいいです・・・・・・・・・・」

「これぐらいだったら大丈夫か？」

「ええ、気持ちいいですわ」

「それにしてもセシリアは肩のこりが酷いな。何かやってるのか？」

「ええ、バイオリンを。そ、そこはちょっと苦しいです・・・・・・・・」

「

「おお、悪い。じゃ、ここは指圧じゃないほうがいいな」

「はああ・・・・。一夏さんって上手ですね」

「まあ昔から千冬姉にしてたからな、マッサージは」

キングクリムゾン

「おーマセガキめ」

「しかし、年不相応の下着だな。そのうえ黒か」

「え・・・・・・・・きやあああ!？」

[illegible]

「せ、せつ、先生離してください」

「やれやれ、教師の前で淫行を期待するなよ。15歳」

「い、い、いっ、インコっ……………!？」

「冗談だ。――おい、聞き耳を立てている4人、そろそろ入って来い」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

「一夏、マッサージはもういいだろう。ほれ、全員好きなどころに座れ」

「ふーさすがに二人連続ですると汗かくな」

「手を抜かないからだ。少しは要領よくやればいい」

「いや、そりやせつかく時間を割いてくれてる相手に失礼だって」

「愚直だな」

「千冬ねえ、たまにはほめてくれても罰は当たらないぜ」

「どうだかな」

「は、はは、・・・・・・はあ」

「ま、まああたしは分かってたけどね」

『・・・・・・』

「まあ、お前はもう一度風呂にでも入って来い。この旅館の部屋を汗臭くしたら困る」

「分かった。そうする」

「・・・・・・」

「おいおい、葬式か通夜か？いつもの馬鹿騒ぎはどうした？」

「い、いえ」

「このような形で」

「織斑先生と話をするのは」

「初めてですし」

「全くしょうがないな。私が飲み物をおごってやる。篠ノ之、何が
いい?」

「ほれ、ラムネとオレンジジュースと、スポーツドリンクにコーヒ
ー、紅茶だ。これぞ他のがいいやつは交換しろ」

「い、いただきます」

「飲んだな?」

「は、はい」

「そ、そりゃ飲みましたけど」

「な、何か入っていましたの?」

「失礼な。ちょっとした口封じだ」

「」「」「あ、そういうことですか」「」「」

「理解が早くて助かる」

「で、お前達は一夏のどこがいい?」

「まずは篠ノ之からだ」

「わ、私は別に・・・以前より弱くなっているのが腹立たしいだけで」

「あたしは腐れ縁なだけだし」

「わ、私はクラス代表としてしっかりして欲しいだけですわ」

「ふむ、そうか、一夏に伝えておこう」

「」「伝えなくていいです」「」

「で、ラウラは？」

「その・・・強い・・・所です」

「そうか・・・で、デュノア、一之瀬のどこがいい？」

「そうですね・・・優しいところですね」

「一夏は役に立つぞ？家事も料理もなかなかだし、マッサージだってうまい」

「というわけで、付き合える女は得だな」

「どうだ、欲しいか」

「」「く、くれるんですか？」「」

「自分で奪え」

「「ええええええええええ」」

「やっぱ自分で奪わないとね」

「分かっているのは一人だけか」

「まあいい。もうそろそろ部屋に帰れよ」

「「「「分かりました」」」」

15話 その境界線の上に立ち

シン・レッド・ライン

15話 その境界線の上に立ち

合宿二日目

今日は午前中から深夜まで丸一日ISの各種装備試験運用と、データー取りに追われる
特に専用機持ちは大量の装備が待っているから大変だ

「ようやく集まったか。————おい、遅刻者」

「は、はいっ」

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明しろ」

「は、はい。ISのコアはそれぞれ————中略————全容はつかめてないということです」

「流石に優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

「さて、それでは各班に振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員迅速に行動するように」

「「「「「「「はい」「」「」「」「」」」」」」

「なあ、拓海は装備ないんだろ？」

「今のところはな。けど、もうすぐ・・・来た」

「え？来たって何が？」

「これだよ。量子変換で送ってもらった」

「なにそれ」

「え？新しいイメージインターフェイスの誘導兵器と大容量のエネルギータンクそれから・・・永久機関に展開装甲だな。後は手で触れただけでコア・バイパスからのエネルギー流出を許可できるようにするとか」

「え？永久機関と展開装甲って何？」

「永久機関は園なの通り、永久的にエネルギーを生み出す機関で、展開装甲は雪平式型と同じような奴だ」

「へーそうなんだ」

「そういうこと。じゃあ取り付けから」

「分かった」

「取り付け完了」

「早っ」

「当たり前」

「ちなみに展開装甲を展開すると速度が3倍になるんだ」

「トランザムか」

「そんな感じだね。もっともデメリットはシールドエネルギーを消費することだけだ」

「あはははは」

「同時刻 篠ノ之 箒」

「ああ、篠ノ之、お前はちょっとこっちに來い」

「はい」

「お前には今日から専用——」

「ちーちゃ~~~~~~~~ん!!!!!!」

「・・・束」

「やあやあ！会いたかったよちーちゃん！さあハグハグしよう！愛を確かめ————ぶへっ」

「五月蠅いぞ、束」

「ぐぬぬ……相変わらず容赦ないアイアンクローだね」

「よっと————やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。大きくなったね箒ちゃん」

「特におっぱいが」

がんっがんっがんっがんっがんっ

「殴りますよ」

「殴ってから言った……し、しかも日本刀の鞘で6回も叩いた！親にも日本刀の鞘で叩かれたことないのに！ひどい！箒ちゃん酷い！」

「え、えっと、この合宿では関係者以外——」

「んん？珍妙奇天烈なこというね。ISの関係者といったら、一番はこの私を置いて他にないよ」

「えっ、あつ、はい。そ、そうですね」

「おい束。自己紹介ぐらいしろ。うちの生徒が困っている」

「えーめんどくさいなあ。私が超天才の束さんだよーはろー終わり」

「はぁ……もう少しまともに出来んのか、お前は」

「うん！無理！」

「そら一年、手が止まってるぞ。こいつのことは無視してテストを始めろ」

「こいつはひどいなあ、らぶりい束さんと呼んでいいよ？」

「五月蠅い、黙れ」

「え、えっとこういうときはどうしたら……」

「ああ、こいつはさっきも言ったように無視して構わない。山田先生は生徒のサポートをお願いします」

「わ、分かりました」

「むむ、ちーちゃんがやさしい……。束さんはえらくじえらしい。このおっぱいお化けめ、たぶらかしたなう！！！！！！」

「きゃああっ！な、なんつ、なんなんですかあ！！」

「ええい、良いではないかー良いではないかー」

「やめろ馬鹿、大体、胸ならお前もかなりあるだろうが」

「てへへ、ちーちゃんのえっち」

「死ね」

「それで・・・頼んでおいたのは」

「うつふつふつ」。それは既に準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ」

「のわっ!？」

一夏に直撃しそうになる。馬にけられてじゃなくて、ISに踏み潰されて死ねばいいのに

「じゃじゃーん!これぞ篝ちゃんの専用機こと『赤椿』!全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ!」

「た、束さん?僕のIS超える自身ありますか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」アセアセ

「じゃじゃーん!これぞ篝ちゃんの専用機こと『赤椿』!全スペックが私の作ったコアで動いているISの性能を上回る束さんお手製ISだよ!」

「言い直したッ!!僕の作ったコアで動いているのに勝つ自身ないんですね」

「えーだつて・・・たっくん私より天才だもん」

「あゝはいはい分かりましたよ」棒

「えーたつくん棒読みはひどいよ」

「分かりましたよ」弱棒

「さあ箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズをはじめようか！たつくんも手伝うから30秒でおわるよん」

「……………それでは頼みます」

「あいあいーたつくんはじめるよん」

「あいー」

「箒ちゃんのデータは先行して入れておいたから、後は最新データに更新するだけだね」

「さて、ぴ・ぽ・ぱ」

「束さん遅いですよ」

「な、なんという速さ！！この私でもそこまで早くないよ！！」

「束さんが遅いだけですよ」

「ちよつとむかつく」

「あ、そうそう。近接格闘を基礎に万能型に調整したから、直ぐになじむとおもうよん！あとは自動支援装備もつけていたからね！お姉ちゃんが！」

「それは、どうも」

「んゝ、ふ、ふ、ふふゝ♪箒ちゃん、また剣の腕前が上がったねゝ
筋肉のつき方を見ればわかるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高い
なゝ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「えへへ、無視されちゃった――はい、フィッテングとパーソナ
ライズ終了ゝ。超早いね。さすが私とたつくん」

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの・・・・・・・・？身内って
だけで？」

「だよねえ・・・・・・・・何かずるい」

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかい？有史以来世界が
平等であったことなんて一度もないんだよ？」

「あ、そうだいっくん、たつくん。白式とマーク？見せてゝ。束さ
んは興味津々なのだよ」

「「はい」」

「データ見せてねゝうりゃ」

「うゝん二人とも男の子だからかなゝ不思議なフラグマップを構築

してるよ」

「東さん、そのことなんですけど、どうして男の俺がISを操縦できるんですか？」

「ん？んゝ．．．．．流石にそれは私にもさっぱり分からないなあゝ。ナノ単位まで分解すれば分かるかもしれないよゝ」

「しなくて結構です」

「にやははゝそういうと思ったよ。んゝまあ、わかんないところがあったらあったでいいけどねゝ、そもそも自己進化するように作ったし、こういうこともあるよゝ。あっはっはっはっ」

「ちなみに後付装備が出来なかったのはどうしてですか？」

「私がそう設計したんだよん」

「え．．．．．！？白式って東さんが作ったんですか？」

「そうだよゝって言っても欠陥機ってポイされてたのを拾っただけなんだけどねゝ」

「それ以上言うな。機密事項に接する」

「いたた。はゝちーちゃんの愛情表現は今でも昔でも過激だね☆」

「やかましい」

「あ、あのっ篠ノ之博士のご高名はかねがね承っております。もし

よければ私のＩＳを見ていただけないでしょうか？」

「はあ？誰だよ君は。金髪は私の知り合いにいないんだよ。そもそも今は箒ちゃんとかーちゃんといっくんとたっくんの数年ぶりの再開なんだよ。邪魔しないでくれる？」

「え、あの・・・・・・・・・・」

「うるさいなあ。あっちいきなよ」

「う・・・・・・・・・・」

「ふー変な金髪だった。外国人は凶々しくて嫌いだよ。やっぱり日本人だね！日本人さいこー。まあ私が身内と認識してる人以外は誰でもいいんだけどね」

「さあ、箒ちゃん。試運転も兼ねて飛んでみよ。箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ？」

「ええ。それでは試してみます」

「おわっ!？」

「どうどう？箒ちゃんが想像した以上に動くでしょう？」

「え、ええ、まあ・・・・・・・・・・」

「じゃあ刀使ってみてよ。右のが『雨月』で左のが『空裂』ね。武器特性のデータおくるよん☆」

「親切丁寧な束おねーちゃんの説明付き」雨月は――――中略――
――機動性なら大丈夫」

「――――やれる！この赤椿なら！」

「すげえ……………」

「……………」

「たっ大変です！お、おお、織斑先生」

「どうした？」

「こ、こっこれを」

「特命任務レベルA、現時刻より対策を始められたし」

「そ、そのハワイ沖で試験稼動をしていた――――」

「しっ。機密事項を口に出すな」

「生徒達に聞こえる」

「す、すみませんっ」

「専用機持ち？」

「二人欠席していますが、そのほかは」

「そ、そ、そ、それでは私は他の先生に連絡してきますので」

「了解した。――――全員！注目！！」

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動に移る。今日のテスト稼動は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自自宅待機すること」

「え・・・・・・・・・・？」

「ちゅ、中止！？なんで？特殊任務行動って・・・・・・・・・・」

「状況が分からないんですけど・・・・・・・・・・」

「とっとと戻れ！以後、許可無く室外に出ていたものは、われわれで身柄を拘束する。いいな！！」

「「「「は、はいっ」「」「」」

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、一之瀬、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰！――――それと篠ノ之もこい」

「はい！」

「では現状を説明する」

「2時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代の軍用IS『銀の福音』^{シルバレオ・ゴスペル}が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

[illegible]

「その後、衛星による追跡の結果、福音はこれから2キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして50分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態を対処することになった」

「教員は学園の訓練機を使用して、空域及び海域の封鎖を行う。よって本作戦の要は専用機持ちに対処してもらう」

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

「はい」

「目標 I S の詳細なスペックを要求します」

「分かった。ただし、これからは二ヶ国の最重要軍事機密だ。けし
て口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁
判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのI Sと同じくオールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動力の特化型ね。厄介だね。しかもスペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴの防御用パッケージが着てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能は未知数だ。持っているスキルも分からん。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は2450キロを超えるとある。アプローチは1回が限界だろう」

「一度きりのチャンスということやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体であたるしかありませんね」

「え………?」

「一夏、アンタの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ問題なのは——」

「どうやって一夏をそこまで運ぶのか、だね。エネルギーを全部使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも目標に追いつける速度が出せるISでなければいけない。超高度度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！お、俺が行くのか！？」

「「「当然」」」」

「織斑、これは訓練ではない。実践だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用気持ちで最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、私のブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきますし、超高度度ハイパーセンサーもついています」

「オルコット。超音速での戦闘訓練時間は？」

「二〇時間です」

「ふむ……、それならば適任————」

「待った待ったー。その作戦はちよつと待ったなんだよー」

「山田先生、室外への強制たい退去を」

「えっ!？は、はい。あの、篠ノ之博士降りてきてください」

「とうっ★」

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっという作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング!」

「・・・出て行け」

「聞いて聞いて!ここは断・然!赤椿の出番なんだよっ!」

「なに?」

「赤椿のスペックデータ見てみて!パッケージなんなくても超高速機動ができるんだよ!」

「赤椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいと。ホラ!これでスピードばっちり」

「説明しましよーそうしましよー」

「展開装甲というのはだね、この天才束さんがつくった第4世代型ISの装備なんだよ!」

「はいここで心優しい束さんの解説開始。まず第1世代というのは『ISの完成』を目標とした機体だね。次が『後付武装による多様化』・・・これが第2世代。そして第3世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』。空間圧作用兵器に、BT兵器、あとはAICとか色々だね。・・・で第4世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』というのが現

在絶賛机上の空論中のもの」

「は、はあ……え、いや、えーと……?」

「ちつつちつ。東さんはそんじょそこの天才とは違うんだよ。これは3時のおやつ前なのさ」

「具体的には白式の『雪平式型』に使用されてまーす」

「「え?」」

「それでうまくいったからなんと赤椿は全身のアーマーを展開装甲にしています」

「ついでに僕のマーク?もね」

「え?なんで?白式の雪平式型と赤椿以外ついてないはずなのに」

「自分で展開装甲を作ったから」

「ちよっ、ちよっと待ってください。え?全身?全身が雪平式型と同じ?それって……」

「うん、むちゃくちゃ強いね。一言でいうと最強だね。でも燃費は悪いよ」

「え?じゃあ拓海のISはすぐエネルギー切れを起こすんじゃない?」

「何の為の永久機関だと思ってるの?実践モードだったらエネルギー切れなんて展開装甲使っても起きないよ?」

「ちなみに赤椿」とマーク？」ば展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃、防御、機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第4世代型の目標である即時万能対応機ってやつだね」

「はにゃ？あれ？何でみんなおつやみたいな顔してるの？誰か死んだの？変なの」

「……………東、拓海……………というよりモンゲンレーテやりすぎだぞ」

「そうだった？えへへ、つつい熱中しちゃった」

「モンゲンレーテはただ単に、スピードが速いだけです。第3世代型の量産機ももう既に発売してますよ？」

「ついでに言うマーク？はもとは第3世代だからそこまでないですよ。ってあれ？そういうえば赤椿よりこっちの方がうえですよ？」

「あ、後展開装甲を使用すると3倍のスピードになりますよ」

「まーあれだね。今の話は赤椿のスペックを完全に引き出したら、って話だからね。でもまあ、今回の作戦をこなすだけならそれぐらいは夕食前だよ」

「ちなみにマーク？の場合、あのAIがついているので、常時100%引き出せますよ」

「分かった。一之瀬と織斑の2名と念のために篠ノ之をつけて3名での作戦とする」

「了解しました」

「来い白式」

「来い赤椿」

「来いマーク？」

「じゃあ、箒、よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

「それにしても、たまたま私たちがいたことが幸いしたな。私と一夏と拓海が力を合わせれば出来ないことではない。そうだろう？」

「ああ、そうだな。だがこれは訓練じゃない。実戦だ。実戦じゃあ何が起こるかわからない。十分に気をつけろ——」

「もちろんわかってるさ。ふふ、どうした？怖いのか？」

「そうじゃねえって。あのな、箒——」

「ははっ心配するな。お前は私がちゃんと運んでやる。大船にのつたつもりでいればいいさ」

「.....」

「（駄目だ浮かっている。早く下げないと）」

『織斑、篠ノ之、一之瀬聞こえるか？』

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。ワンアブローチ・ワンダウン短時間での決着を心がけろ』

「了解」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいのでしょうか？」

『そうだな。だが無理はするな。お前はその専用機を使い始めてからの実戦経験は無い。突然なにかしらの問題が出ると思え』

「わかりました。出来る範囲で支援をします」

『織斑、一之瀬』

『は、はい』

『はい』

『どうも篠ノ之は浮かっているな。あんな状態ではなにかしらを仕損じるかも知れん。いざというときはサポートをしてやれ』

「わかりました」

「了解です」

『頼むぞ』

『では、作戦開始!!』

「ふたりとも、先に行っておくぞ」

「ああ」

「分かった」

「暫時衛星リンク確立・・・情報照合完了」

「よし、『織斑先生、リミッターを解除します』」

『分かった』

「よし!イグニッションブースト」

「見えたぞ!一夏」

「!!」

「加速するぞ!目標に接触するのは十秒後だ。一夏、集中しろ」

「ああ」

「なっ!?!」

「敵機確認。迎撃モードへ以降。《シルバー・ベル》、稼動開始」

「!?!」

「くっ……あの翼が急加速をしているのか」

「拓海、箒、援護を頼む」

「既にやっている」

「任せろ!」

「くっ!このっ……!」

「!?!」

「ぐうっ!?!」

「箒、一夏と左右から攻めてくれ。俺は中央から行く」

「「わかった」」

「一夏、僕が動きをとめるから早く!?!」

「分かった」

「はあああああ!?!」

「La……♪」

「やるなっ……だが押し切る」

「!」

「二夏、何をしている」

「船がいるんだ! 海上は先生たちが封鎖したはずなのに……..
ああくそつ、密漁船か!」

「馬鹿者! 犯罪者などかばって……..。そんな犯罪者など見
殺しても構わんだろうが」

「箒!」

「ッ……!」?

「二夏、密漁船の護衛は僕がするから早く福音を」

「分かった」

「箒、そんな寂しいこと言うな。言うなよ。力を手にしたら弱い奴
のことが見えなくなるなんて…….どうしてなんだよ」

「わ、私…….は…….」

具現化維持限界だ…….まずい!」

「箒いいい!」

「ぐああああっ!」

「二夏っ二夏っ二夏っ」

「う・・・・・あ・・・・・」

15話 その境界線の上に立ち（後書き）

弾完全に空気です。というか存在をわすれられています？
今回は風邪で寝込んでいますw

出番？そんなのあるか分かりませんよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8190w/>

IS 二人目の男性IS操縦者は転生者？

2011年11月13日18時20分発行